

ボストン日本人学生会の記録

三好 彰

ボストン日本人学生会の記録

1908年—1954年

目次

1. はじめに	1
2. 記録集が日本に届くまで。	1
3. ボストン日本人学生会の活動の概要	5
4. 発足時の活動(1908-1912 学年度)	9
5. 第一次活動停滞期(1913-1916 学年度)	19
6 活発なアメリカ人との交流(1917-1921 学年度)	26
7 キリスト教徒学生会の期間(1924-1928 学年度)	39
8 戦前の最後の期間(1930-1933 学年度)	42
9 記録の空白期間(1934-1947)	51
10 戦後の活動(1948-1954)	57
11 考察	71
12 むすび	75

ボストン日本人学生会の記録

1. はじめに

アメリカ合衆国マサチューセッツ州のボストン地区で学んだ日本人とその周辺の人々を記した4冊のノート（以下では『ボストン日本人学生会の記録』と呼ぶ）がある。最初の記事は1908（明治41）学年度であり、最後は1953（昭和28）学年度までであって、半世紀近い期間に及ぶ記録である。太平洋戦争をはさんだ数年分など記録の欠けている時期もあって、それはそれで日米交流の歴史の一面を語っている。

明治末期にハーバード大学やスタンフォード大学など一つの大学の内の日本人会が活動していた。たとえばハーバード大学では構内誌であるクリムソン（The Crimson）の1903年12月9日号に日本人会（the Japan Club of Harvard）が発足したことが報じられている。それによると会長は木村重治（1874-1977、立教大学学長）、副会長 グーデル教授（G. L. Goodale）、事務局ベディンガー（G. R. Bedinger）、会計・八木秀次（八木アンテナの発明者として世界的に著名。ボストン日本人学生会のメンバー）、幹事グリーン（J. D. Green）となっている。

しかし大学をまたがった留学生の活動の記録は珍しい。ボストンは歴史を誇る学術都市であって優秀な日本人留学生がボストンを目差したし、会合を行うに程よい人数が集ったことが背景にあらう。

この『ボストン日本人学生会の記録』には学生ばかりでなく、学業を指導したアメリカ人とともに学生を支えたアメリカ人と在留邦人が出ており全体で800人を越える。著名人も多数見受けられるが、本書中では敬称を略す。

日米関係の一面を表している留学生の活動をこの記録に見ることが出来る。

2. 記録集が日本に届くまで。

2.1 鶴見俊輔と『ボストン日本人学生会の記録』

戦前にハーバード大学で学んだ哲学者・鶴見俊輔は著書『北米体験再考』¹⁾で次のように、『ボストン日本人学生会の記録』のことを述べている。

連邦捜査局にふみこまれた時、私の部屋からとられた荷物の中には、ボストンの日本人学生会の記録もあった。それは、そのころこの地方には日本人留学生がほとんど残ってなくて、本城（今の東郷）文彦が会長、私が書記ということになっていたためだが、ひきわたされたその記録には、歴代のこの地方の日本人留学生の名前が出ていた。小村寿太郎とか金子堅太郎・池田斉彬の時代のもはなかったが、はじめのほうに山本五十六の署名があったのをおぼえている。

鶴見が開戦の頃に保管していたというわけである。

そうして鶴見俊輔は『北米体験再考』から40年近く間を置いて出版した上坂冬子との著

¹⁾ 鶴見俊輔著『北米体験再考』、岩波新書、1971年

作『対論 異色昭和史』²⁾で、次のように述べている。

留学生名簿はF B Iが私のところにきた時に没収されたが、いまはハーバード燕京研究所にあるそうです。私は戦後は一度もアメリカに帰っていませんから現物は見えてませんが、『パール判決を問
い直す』（講談社現代新書）という本を出した中島岳志が実際に見て確かめてくれました。私はコ
ピーで見ている。

早速、中島岳志が鶴見に報告した新聞記事³⁾を見た上で中島に連絡を取ったところ、「ハー
バード大学に鶴見の署名が入った旧蔵書はあるが『ボストン日本人学生会の記録』は含まれ
ていない」旨の回答を得た。鶴見の勘違いである。

2.2 『ボストン日本人学生会の記録』の再発見

『ボストン日本人学生会の記録』の戦後最初の記事は1951年7月の日付であり英文で次
のように書かれている。

July 1951

This book was discovered among the possessions of the late Dr. S. Fujishiro who passed
away in Tokyo on September 17, 1946. With every best wish that friends far from home may
continue to meet in Cambridge and serve as ambassadors of goodwill between Japan and
America, I here return this volume to The Japanese Students at M.I.T.

Motoko Fujishiro

この記事を書いた Motoko Fujishiro（藤代素子、結婚後 Motoko Fujishiro Huthwaite）は
現地生まれの二世である。日米開戦のために両国間で相手国に居住していた両国民を交換
しあった日米交換船¹⁾で帰国したが、戦後すぐに留学していた。

藤代素子は「1946年9月17日に東京で他界した亡父（藤代真次）が現地に残しておいた
遺品の中から『ボストン日本人学生会の記録』を見つけた。故国から遠く離れたケンブリッ
ジで出会い、日米間の親善大使となろう。記録集をMITの日本人学生に戻す」と書いてい
る。この種の資料は太平洋戦争が始まってからは持ち帰ることが許されなかったのである。

なお素子は母と弟とともに第一次日米交換船で帰国し、真次は後れて第二次交換船で帰
国した²⁾。藤代素子から「母子が帰国後に父が住んでいたアンバセダー・ホテル
(Ambassador Hotel) という名のアパートに他の思い出の品とともに残っていた」との連絡
が届いた。

『ボストン日本人学生会の記録』を藤代素子から譲り受けたのは野島豊志(留学生)である。
藤代素子がMITの日本人学生に戻すと書いているのは戦前最後の記事の書かれているノー

²⁾ 鶴見俊輔、上坂冬子共著『対論 異色昭和史』、PHP新書、2009年

³⁾ 「64年振りに蔵書と“対面”」、京都新聞、2006年5月31日朝刊、第11面

¹⁾ 『日米交換船』鶴見俊輔、加藤典洋、黒川創、新潮社、2006

²⁾ 「“齒科戦列”へ再起」、朝日新聞、1944年2月14日

トの扉に「このノートは MIT 日本人学生会のもの」 (This book belongs to The Japanese Student Club of M.I.T.) と書かれているからであろうが、実は野島はハーバード・ロー・スクールで学んでいた。藤代にすれば日本人としての一体感で所属大学は気にするまでも無かったのだろう。野島は上記の藤代の英文の記事に続けて、次のように書いている。

一九五一年七月中旬の晴々した暑い或日の朝私はロングフェロウ公園(Brattle St.)の近くをハーバードスクエアへ急いでみた。昨日からマカアサア元帥がボストンを訪問して大歓迎を受けてゐるので其の模様をカメラに収め、それからハーバードサンマースクールへ出席する為であった。

と偶然藤代素子嬢に出遭った。彼女が其時に戦前のボストン地区日本人留学生会の名簿が見つかったから見せて上げやう多くの知名の士の名が出てゐて面白いからと云ふのであった。そして近日中私の下宿先である Prof. Haverler¹⁾(ハーバードで国際貿易を担当 #3 Mercer Circle – Brattle St.)の所へ届けて上げることを約して別れた。

其後数日して五冊のノートが私の留守中に届けられてゐた。これが此の五冊の日本人留学生記録であった。私は単なる名簿だとばかり思つてゐたのだがこんな貴重な然も一九〇八年以来の記録であるとは予想してゐなかつたので此を手にした時驚きと同時に大いなる喜びをおぼえた。戦争によって滴らされた空白の期間を超えて前の日本人留学生の活動の模様を之等記録を読むことが私には何世紀も前の事を読んでゐるやうな気がした。と同時に戦後も存命乃至は活躍してゐられる先輩諸氏に此の記録をお目にかけてらどんなに喜ぶだらうかと考へた。此等の記録は写真にでも撮つて持ち帰り度いと思ふが、今はその時間的余裕が無いのが残念である。

私はこのような貴重な記録をよく保存してゐて下さつた故藤代眞次氏及之を同氏の遺品中に見出して私に添書をして引渡して下さつたラドクリフの学生藤代素子嬢に衷心より謝意を表する次第である。

実は私達が此の記録を手にする迄このやうな組織立つた留学生会がボストン地区に存在してゐた事実を知らなかつたし又私達が昨年発足した留学生会は将来の組織立つた留学生会の母体を作り上げるとふ位の気持ちで始めたので更に又後に述べる如く毎月の例会を成功裡に行ひ得やうとは予期してゐなかつたので会の記録を作ることも考へなかつたのである。

ところが此の記録を入手するに及んで第二次大戦後に新発足した我々の留学生会の記録を残すことが如何に有意義であるか又記録を留めることが会の事務を担当して来た私の義務であることを悟り此を書き残すわけである。

私が六月にハーバードのロースクールでの勉学を終り、其の俣帰国してゐたらこの一年間の新しい留学生会の記録は永久に纏められる機会を喪つてゐたのである。私が今年のサンマアスクールに出席する為にケンブリッジへ舞戻り路上で偶然に藤代嬢に会つたために私の義務を果す機会を得たことを私の為に更に日本留学生会の為に大いなる喜びとする次第である。

藤代嬢が添書された如く此の記録が日米親善の大使の役を果たし又此記録に名を留むる人達が世

¹⁾ Prof. Haverler はハーバード大学教授 Gottfried Haberler の誤記である。Gottfried Haberler はオーストリア生まれで戦前に米国へ移住した経済学者である。

界人類の発展及平和の向上に大いに役立れることを祈って止まない。

此の記録はケンブリッジで認め得ずカネティカットのスタンフォードの兄の所に滞在中の其暇を得ずシカゴ、ロサンゼルス、サンフランシスコと持廻りアメリカ本土を去る二日前にパークレーで之を書き終えてケンブリッジへ郵便送する。

2.3 行方不明の一冊

野島は上記のように『ボストン日本人学生会の記録』は五冊だと銘記しているが手元には四冊しかなく、鶴見が書記だった頃の記事が見当たらない。

なお『ボストン日本人学生会の記録』の1951年11月10日の会合の記事に「鈴木がボストン日本人学生会の略史を紹介し、記録の一部を読み上げた」(Suzuki made a short history of Japanese Students Association in Greater Boston and read some part of the diary.) ことを英文で書いている。なおその時の手元原稿と考えられるメモ(日本語)がノートに貼り付けてある。このメモでは戦前の最後の記事は「昭和9年(1934年)の村松氏の精神病の話をきく座談会」¹⁾であり、戦後の最初は上述した藤代素子の英文のメモだとしている。このことから、この時点で鶴見が書記だった開戦前後のノートが無かったのが分かる。野島がケンブリッジに郵送しなかったか、郵送したが届かなかったか、あるいは到着後に行方が分からなくなったのであろう。

なお1960年から長期間ハーバード大学で教鞭をとった板坂元(故人)は現地のボストン日本人会の会報に「ボストン日本人会今昔ばなし」という連載記事を寄稿したが、その最初の記事(1973年7月5日号)で上述した鶴見の著書を引用して次のように書いている。

今この文を書いている私の机の上には、「はじめのほうに山本五十六の署名があった」ボストン日本人会の記録が置いてあるからである。古びて装幀もボロボロになっている四冊の記録の、いちばん古いものには間違いなく山本五十六の署名が出ている。鶴見の頃の記録は失われている。というわけで戦後四半世紀経った時点でも鶴見の書いた記事のあるノートは見付かっていなかったことが分かる。

2.4 『ボストン日本人学生会の記録』の日本への将来

『ボストン日本人学生会の記録』(四冊)を日本に持ち帰ったのは1984年から4年間ボストン総領事を務めた谷口禎一(故人)である。晩年に病床にあった谷口とコンタクトしたが入手の経緯は思い出せないとのことであった。

病のこともあって2005年に谷口は初代ボストン総領事の井口武夫に『ボストン日本人学生会の記録』を託した。この時に日本ボストン会の会長であった井口が内容の調査を企画した。

¹⁾ 『ボストン日本人学生会の記録』の戦前最後の記事は昭和9年1月5日の新年会である。このメモに書かれている「村松氏の精神病の話をきく座談会」は昭和8年12月15日に開かれており出席者の名簿が残っているので、このメモを書いた人が見落としたようだ。

3. ポストン日本人学生会の活動の概要

4冊からなる『ポストン日本人学生会の記録』に書き残されている活動状況の概要を記す。時期によって活動にかなりの差があるので時期を区分けして記す。著名人を多数見受けるが、文中では敬称を略す。

3.1 発足時の活動(1908-1912 学年度)

第一回例会が1908年11月1日に開かれて会長（望月松太郎、民間外交活動家）などの役員を決めたとの記事がある。しかし巻末に1907学年度の名簿があり会長（藤岡信一郎、小学校長）を含めて6名が出ているので、前年度から活動を開始していたのかもしれない。なおこの第一回例会に来賓として出た藤岡はその直後に帰国の途についている。

当初の会員は全員ハーバード大学への留学生であり、その他の大学の留学生が出てくるのは1909年度からであるが準会員であって正会員のハーバードの留学生と区別している。

1908年度から名誉会員の制度を設けており、ポストン駐在日本国名誉領事のウォルコット（Edwin H. Walcott）や東大教授だったモース（Edward Sylvester Morse）等を挙げている。

最初の年会は1911年5月26日に晩餐会として開かれた。正会員6名、準会員2名と名誉会員6名が出席した。

この時点では日本政府の出先機関がポストン地区に無かったこともあり、高平駐米大使、菊地大麓男爵（東大総長、京大総長、文部大臣を歴任）や新渡戸稲造などの著名人の来訪時に受け皿になっている。勉強の傍らでの対応は楽ではなかったことだろう。

3.2 第一次活動停滞期(1913-1916 学年度)

『ポストン日本人学生会の記録』に1913学年度から1916学年度までは活動の記事がない。第一次世界大戦の余波かもしれないが、この大戦のために欧州への留学ができなくなり米国への留学生が増えたことが別紙として残っている名簿で確認できる。

3.3 活発なアメリカ人との交流(1917-1921 学年度)

アメリカ人を招待した茶話会が1919年度と1920年度に一回ずつ行われて、それぞれの招待者のリスト（80人と68人）がある。アメリカ人ばかりでなく在留邦人も招待されている。さらに日付は無いが1922年度の茶話会用と考えられる120余人からなるリストがある。

そのほかに日本人だけの集会在毎年複数回開かれている、一番多いのは1919年度の8回である、奇しくも山本五十六（元帥）が留学していた時期である。多いときは50人の参加者を数える。その準備を含めて幹事団は多忙を極めたことだろう。

なお会則の変更の記事が見当たらないが、この頃になると留学先の大学による会員の差

(正会員と準会員)が見られなくなっている。

1919年12月20日から1922年4月15日までに開かれた8回の会合の出席者(日本人だけ)の署名は第一巻に書かれている。第一巻と第二巻に重複した記事は無いので、この二冊は併用されていた時期があったと見なせる。

1920年10月11日と31日にハーバード大学日本人会が開かれたという記事がある

3.4 第二次活動停止期(1922-1923 学年度)

1922年度と1923年度の記事は無い、後者は関東大震災の影響であろう。招待者リストが用意されているが、1922年度の茶話会が実際に開かれたという記事もない。

なお1920年に成立した禁酒法は施政者の期待とは裏腹に社会治安を乱す輩の暗躍を促して集会がしにくくなったわけだが、それが記事の無い原因かもしれない。

3.5 キリスト教徒学生会の期間(1924-1929 学年度)

1924年にいわゆる排日法が成立し日本人のアメリカへの移民が禁止されたことでアメリカ人と公に交流することがはばかれたのであろうが、アメリカ人との茶話会が行われなくなった。1924学年度から1929学年度までの期間はキリスト教徒の学生が日本人学生キリスト協会 (Japanese Student Christian Association)として活動しており、その記事が第三冊目のノートに書かれている。

最初の内は礼拝のために月例で20人程度が集っていた。朝鮮人を交えてアメリカ人牧師ウェルチ (Herbert George Welch)による朝鮮問題と題する講演を聴いたことがある、講演の内容は書かれていないが朝鮮におけるキリスト教布教の背景が論じられたと推察される。ウェルチは朝鮮で布教したが、長崎の女学校・活水学院の理事でもあった。

1926年の新年会のことがカリフォルニアで発行されていた邦字新聞に取り上げられており、その記事が糊付けされている。また4月にはボストン郊外へハイキングに行っている。

1926年度の活動からお祈りすることを止めており、月例会も止めて一年に3回の茶話会に切り替えている。茶話会には30名程度が集っている。

1929年度から日本人学生キリスト協会を発展的に解消させてボストン日本人学生会 (Greater Boston Japanese Students Association) に改変することになったことを伝えて第三冊目の記事は終わっている。

3.6 戦前の最後の期間(1930-1933 学年度)

第4冊目のノートを開いた扉のページに「このノートはMIT学生会のもの」 (This book belongs to The Japanese Student Club of M. I. T.) と書いてあり、さらに「MITに日本人の学生が居なくなれば、このノートをボストン日本人学生会の事務局に渡して欲しい」という要望が次のように英文で書かれている。

In case of no resident Japanese students at M.I.T., please leave this book in care of the

secretary of the Japanese Students Association of the Greater Boston, Massachusetts.

日本からの留学生がボストンから居なくなる事態が想定できる状況だったわけである。

このノート最初の記録は1929年11月16日付けのハーバード大学とMITの合同集会である。ついでMIT留学生だけの集会在2回あり、1933年10月21日の大ボストン日本人学生会と同年12月15日の座談会の記事に続いて、戦前最後の記事は1934年1月5日の新年会(参加者20名)である。

当時ハーバード大学の講師であった都留重人(経済学者)は日本人の集りだと随筆に書いており留学生の会合だとの認識は無かったようである、それを裏づけるように戦前最後の新年会の参加者に学生は少ない。

発足時点から開戦直前までについて記録に残っている活動状況を学年度ごとの役員会と集会の回数で示すと図3.1のようになる。

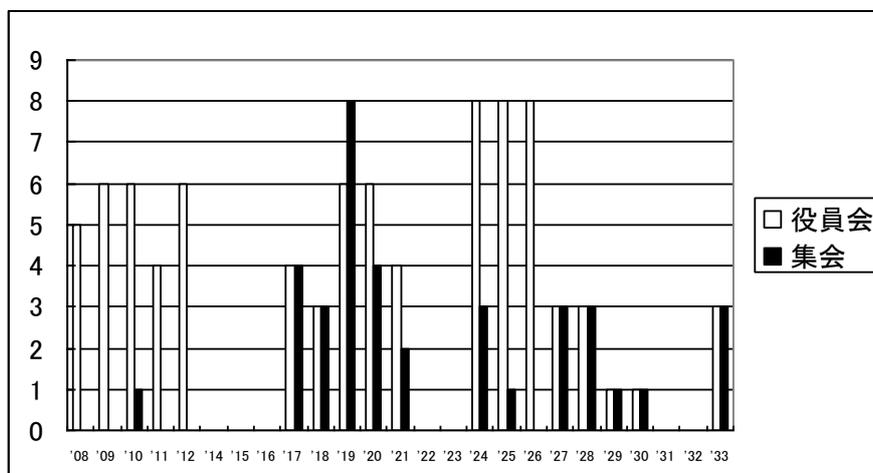


図3.1 ポストン日本人会の活動状況(1908-1933 学年度)

3.7 記録の空白期間(1934-1947 学年度)

1934学年度から太平洋戦争をはさんで1947学年度までの記録が無い。鶴見俊輔(哲学者)が著書にボストン日本人学生会の書記役だったと書いているが、現存する4冊の『ボストン日本人学生会の記録』に鶴見の書いた記事は見当たらない。上述したように第4冊目のノートの冒頭にMITの学生会の持ち物だと書いてあるのでハーバード大学に学んだ鶴見はこれではないノートを用いたと考えられるが、そのノートが現在では行方不明である。

なお何かのゲームの結果を書いたメモが残っているので、開戦直前期の関係者の一部の名前が分かる。

3.8 戦後の活動(1948-1954 学年度)

太平洋戦争の開戦にともない米国への留学ができなくなったが、それが解除された1948

年度を待っていたかのようにボストン地区にも日本人留学生がやってきた。そして10月8日金曜日に歓迎会を行うという鮎川弥一（ベンチャー・キャピタリスト）が書いた案内状が残っている、参加者は不明である。

1949学年度に留学した野島豊志（弁護士）は11月10日に日本人8名とハワイの日系人学生4人が集って懇談したと書き残している、これが参加者名の分かる戦後最初の集会である。

1950年10月に日本人留学生会を結成し幹事（陣容不明）を決めたが会則は作らないことにしている。そして11月11日に全マサチューセッツ州日本人留学生を約30名の参加のもとに発足させた。この会合(総会)の後の会食に一世と二世を招待し合計で104名が参加した。この後1951年5月まで毎月集会を行っている。

1951学年度も10月から翌年の5月まで月例で集会を行っている。この集会でライシャワー博士（後に駐日米国大使）、東大で国文学を学びハーバード大学で日本学を立ち上げたエリセフ教授、米国海軍のキャンベル（George W. Campbell）艦長、GHQの天然資源局長だったオースチン博士（Dr. Oliver L. Austin）を講師として招聘するなど充実した活動を行った。出席者に在留邦人が多数居る、これを受けて学生の枠を越えた運動にすることを検討したが翌年度委員への申し送り事項にしている。

1952年度は大物講師の講演会は行わなかったが、ハーバード大学の若手研究者から20年振りに共和党が勝った大統領選挙の話の聴き、日米学生による討論会を初めて行って日米両国の諸問題を論じた、またボストン・マラソン選手の激励会など例会は毎回工夫を凝らしている。

1953年度はエリセフ教授が2度目の講演を巧みな日本語で行った。また忘年会、新年会、ピクニックなどを行った。

1954年度にボストン日本人学生会としての活動は無くなり、ボストン日本会（Japan Society of Boston）へと発展した。そのボストン日本会の例会の案内状がノートに貼り付けであるが活動内容は記されていない、このノートの役目が終わったためと受取れる。

戦後の記録から活動状況を学年度ごとの役員会と集会の回数で示したのが図3.2である。

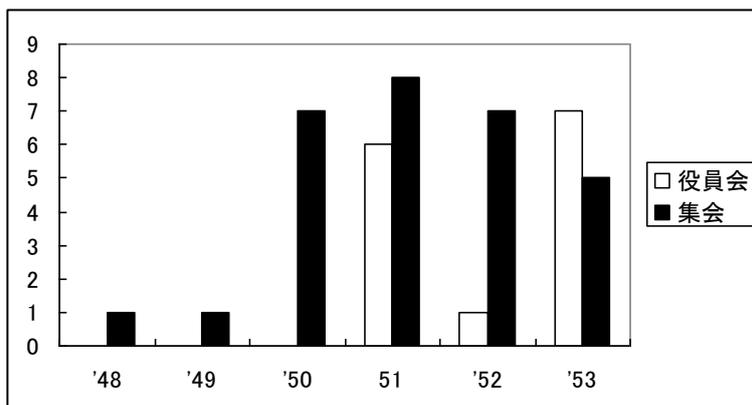


図 3.2 ポストン日本人会の活動状況(1948-1953 学年度)

4. 発足時の活動(1908-1912 学年度)

4.1 第一回例会

第一回例会が 1908 年 11 月 1 日に開かれた。議事全文は次の通りである、なお読みやすさのために旧漢字は新漢字にしカタカナ書きをひらがな書きに直した。

時日 千九百八年十一月一日 午後第八時

会場 浅野良三君方 43 Beck Hall

出席者

新井米男君 浅野良三君
久布白信勝君¹⁾ 益田信世君
望月松太郎君 尾寄正徳²⁾
瀧山良一君

来賓

グリーン氏 岩谷喜三君 藤岡信一郎君

役員選挙

衆議指名選挙を以て可とす。依てグリーン及藤岡二氏に役員の薦挙を委託す。

新任役員如左

会長 望月松太郎
副会長 新井米男
幹事兼会計 尾寄正徳

議事 (望月会長 議長席に就き左の議決をなす)

一 天長節祝賀会に関する件

来十一月三日ボストン日本の同人主催の天長節祝賀会に於て本倶楽部は望月会長若くは新井副会長を代表者とし祝意を表すべきこと。

一 会員集会に関する件

本倶楽部は毎月一回の例会を開催す。
臨時会は必要ある毎に会長之を招集す。

会場を提供した浅野良三(浅野セメント副社長など)は浅野財閥の創業者総一郎の次男である。

1) ハーバード大学の資料では久布白直勝

2) 尾寄正徳に君が付してないことから書記担当だったのが分かる。

新井米男（東京海上火災保険会社のアメリカ支社現地代表）はニューヨークで生糸商店を成功させた新井領一郎の長男（日系二世）であり、ライシャワー（Edwin Reishauer）夫人のハルは姪にあたる。明治末期の留学生は日本の大学を卒業してアメリカの大学院で学ぶ人が多くなったが、日系二世の新井は学部から大学院まで長い期間ハーバード大学で学んだ。

久布自信勝と書かれているがハーバード大学の在席記録から久布白直勝（牧師）と見なせる、本人は夭折したが夫人の落実（徳富蘇峰・蘆花の姪）は女性参政権獲得や廃娼運動などで戦後まで活躍した女性運動家である。

益田信世（初代小田原市長）は三井物産の創設者益田孝の三男である。なお明治初期に津田梅子、山川捨松とともにアメリカ留学した永井繁子は叔母にあたるなど、一家を上げての著名なアメリカ通である。

初代会長の望月松太郎は早大文学科を卒業後に私費で留学した。御子孫によると家庭の事情で一時帰国して再渡米した由であるが卒業名簿に名前が見当たらない。帰国後に駐日米国大使の秘書を務めたほか、昭和期には海外視察団の通訳として名を残している。

尾寄正徳は英国系大手商社 Sale and Fraser Co.の在日部門に勤務し、瀧山良一（早大英語政治科卒）は大正末期に大阪市助役であった。

来賓のグリーンはアメリカン・ボード（American Board）のミッションで来日したダニエル・クロスビー・グリーン（Daniel Crosby Greene, 1843-1913）の日本で生まれた息子のジェローム・デービス・グリーン（Jerome Davis Greene）である、この時点ではハーバード大学長の秘書であった。

他の二人の来賓の岩谷喜三（不詳）と藤岡信一郎（小学校校長）¹⁾はともにハーバード大学での勉学を終えて帰国する寸前であった、二人とも前学年度の会員であった。藤岡は著書¹⁾に翌々日の「11月3日にボストン港から欧州経由で帰国した」と書き残している。

なお第一冊目のノートの巻末に纏めてある前年度(1907年学年度)の名簿が出ており、会長は藤岡信一郎であり、幹事兼会計が岩谷喜三であって尾寄正徳を含めてローマ字で次のように書かれている。

Active Members

Shinichiro Fujioka President

Kentaro Hori

Katsuji Inahara

Kichizo Iwaya Secretary Treasurer

Matsutaro Mochizuki

Masanori Ozaki

稲原勝治は英学者・斎藤秀三郎が創設した正則英語学校の卒業生であり、ジャーナリスト

1) 『花八ツ手』、藤岡李江（信一郎の俳号）、1930（私家本）

および外交評論家として一家をなした。Kentaro Hori はハーバードで教育学を学んだが帰国後の消息はつかめていない。このように名簿が残っているので、上記の第一回の例会の前にボストン日本人学生会は活動を開始していたようである。

4.2 最初の名誉会員

第2回目の例会は一ヵ月後の1908年12月4日に新井宅で開かれた。名誉会員の制度を設けることとし、下記の人々に決めている。

Lawrence B. Evans, Esq. 森本銀太郎 Shintaro Morimoto, Esq.

J. D. Greene Esq. C. McCauley, Esq.

Harris Kenedy (ママ) , Esq. Edward S. Morse, Esq.

L. H. Lane, Esq. D. W. Ross, Esq.

Edwin H. Walcott, Esq.

Jerome Davis Greene は上述した。

レイン (Lemuel Lane) は1889年に来日したユニタリアン宣教師であり日本アジア協会・会長を務めた。マッコリー (Clay McCauley) は1889年に来日したユニタリアン宣教師であり、日本アジア協会副会長や日米協会会長を務めた。

モースは1877年に来日し大森貝塚を発見した、また東大教授となり進化論などを論じた。

ウォルコット (Edwin H. Walcott) は当時ボストン駐在日本国名誉領事であった。

ロス (Denman Waldo Ross) はハーバード大学の美術の教授であり、美術コレクターとして収集した日本美術品をボストン美術館に寄贈した。

ケネディ (Harris Kennedy) 博士はラフカディオ・ハーン (Lafcadio Hearn) の研究者であり、その膨大なコレクションをハーバード大学図書館に寄贈している、また自宅に日本庭園を持っていてボストンを訪問した日本人を招待するなど知日家である。

エバンス (Lawrence B. Evans) はタフツ (Tufts) 大学教授であり、森本銀太郎は美術商・山中商会のボストン支店長であった。

これらの人々が日本人留学生を温かく迎えていたことが背景にあったことが偲ばれる。この後に次の3人を名誉会員に追加している。

ハーバード大学の経済学者 William Bennett Munro

陸軍大佐 Henry Walker

劇作家 Frederick Lansing Day

名誉会員を晩餐会に呼ぶが「名誉会員より会費を徴せず。月定会費積立金を以て、若しくは正会員これを支弁するものとす」と第5回例会(1910年5月1日)で定めている。

4.3 準会員

発足時の正会員は全員がハーバード大学への留学生であり、その他の大学の学生を準会

員としているが、第4回（1909年3月5日）の例会に初めてその他の大学から来賓として次のメンバーが出席した。

テクノロジー 朝永五郎 鈴木岩三

ボストン大学 影山千萬樹

テクノロジーは現在の MIT(マサチューセッツ工科大学 (Massachusetts Institute of Technology))のことであり、当時は Boston Tech(Technology)と称した。朝永五郎は海軍機関学校卒であり、Boston Tech でタービンなどの機械工学を学んだ、また夏休みに造船所で工場実習をした。

鈴木岩三（正しくは岩蔵）は砂糖を研究して化学工学の学士号を取得した、帰国後に現在の帝人（株）や双日（株）につながる鈴木財閥を作り上げた、しかし同社は昭和初期に銀行の取り付け騒ぎに巻き込まれて倒産してしまった。

影山千萬樹は戦後、早稲田大学の英語の教授であった。

なおこの例会に先立つ第3回例会（1909年1月15日）で「正会員は月定会費として毎月金五十仙宛を納付すべきこと」と定めており、準会員に会費は求めている。ただし「晩餐会の経費は出席正准会員支出の会費（晩餐会々費）及び月定会費の積立金を以て之れが支払に充て若し不足を生じたる場合は正会員の負担とす。」として準会員に晩餐会の参加費は課している。このように定めてから朝永等に声をかけたわけである。

4.4 英文の議事録

1909 学年度となり日系二世の新井米男が会長になった、それにもなつて議事録が英語で書かれている。書き出しの部分は次の通りである

1st meeting.

October 16, at Beck Hall 37.

The annual election of officers for 1909-10 was held.

Mr. Arai was elected for president.

Mr. Asano was elected for vice president.

Mr. Masuda was elected for secretary treasurer.

A letter from Mr. Takiyama was read by Mr. Motchizuki. Mr. Takiyama proposed to elect Mr. Ozaki, who was former member of the club, an associate member of the club. He also suggested to change the monthly meetings to every other month.

This(sic.) suggestions were discussed and dropped.

新井米男が第二代目の会長、浅野良三が副会長、益田信世が幹事兼会計担当となった。望月が瀧山の手紙を代読しているが、それによると尾寄正徳は帰国したので正会員から準会員に変わっている。なお瀧山が月例会を隔月開催に変えるように提案したが採用されなかつ

た。

1909 学年度の第一回会議（1909 年 10 月 16 日）は 8 時から始まって 9 時に終わり、引続いて同じ場所で次の来賓を招いて食事をした。

Mr. J. D. Greene

Lieut. Goto

Mr. Chutarō Mashima

Mr. Yoshio Tanikawa

Mr. Shogoro Washio

Mr. Suzuki

J. D. Greene と鈴木（岩蔵）は前出である。後藤少佐（兼三）は海軍から派遣されて MIT で学んだ技師であり、タービンを研究して学士号を取得した。間嶋忠太郎はハーバード大学で学士号を取得している、日本の住所が新潟県濁川であるが帰国後の活動は不明である。鷲尾庄五郎は淡路島洲本の出身でありハーバード大学で博士号を取得したが卒業後の動向は不明である。谷川義男については後述する。

なお 1909 年 3 月 5 日の例会に次の記事がある。

奨学の目的を以て日本人学生のためハーバード大学にスカラシップ設置の件

当提議に対し全会一致を以て之の賛同することを可決す。而して奨学資金基本金募集の方法、
其他の計画に就ては尚熟議を要するを以て之を後会の議事に附す。

後続の記事が見当たらないのでどのように運用されたのかは不詳である。

4.5 主な出来事、主な人

(a) 菊池大麓男爵の饗応

1910 年 3 月 11 日の例会に下記の記事がある；

Report of Baron Kikuchi's dinner was made.

Special fee of \$1. The dinner was decided to be paid by the member who attended Baron Kikuchi's reception.

星一（ショート・ストーリー作家・星新一の父）がニューヨークで明治末に創刊した『日米週報(The Japanese-American Commercial Weekly)』の 1910 年 2 月 26 日号は菊池男爵がボストンを訪問したことを報じている。それによると男爵は次のように 3 つの会合に出席して講演している。

2 月 8 日 ポストン・エコノミック倶楽部主催の晩餐会

2 月 9 日 ハーバード大学で講演「新日本」 300 人出席

2 月 13 日 ポストン日本人会による歓迎会 出席者は 45 名

2 月 9 日の講演後にローウェル (Lowell) 総長、名誉総領事ウォルコット、タフツ大エバン

ス (Evans) 教授などを招待してハーバード大学の日本倶楽部がレセプションを行ったが、上記のように3月11日の例会でこのときの費用を参加した学生で持つことに決めたわけである。学生が賄ったのだからレセプションは大掛かりでなかったのだろう。

菊池男爵の2月13日の講演の概要が日米週報に次のように掲載されている（なお旧漢字を新漢字に変えた）。

米人の多くは日本の内情を知らぬから大なる問題が起きる。此地に滞在せらるる諸君は米人間に立入りて大に日本を紹介する義務を持って居らるるのであります。近頃外務卿ノックスの日本に対する提議の如きが生ずるのは畢竟吾国が米人に能く知られざるの致す所であります。

前年末に国務長官ノックスが満州の中立化を画策した国際問題を例に引いており、菊池自らの留学経験を踏まえての発言であろう。

菊池男爵のほか高平駐米大使（1909年5月）や新渡戸稲造（1911年8月）などの著名人がボストンを訪れたときにも学生会が対応している。また金子堅太郎が来るという記事がある（1910年4月）が実際には行かなかったもので、その後の記事に出てこない。この時点では日本政府関係の公的な機関がボストン地区に無かったので、留学生が賓客の対応をしていたのだが勉学に支障をきたすこともあったことだろう。

(b) ボストンの日本人界

この時期(1908-1912 学年度)のボストン地区の日本人の会合について『日米週報』が断片的に書いている。留学生に関わるものがあるので取り上げる。

(b-1) ボストン日本人会

先ず日本人会であるが、この言葉が最初に出てくるのは1909年9月25日号である、それはモース博士の庇護を得て美術商として名を成した松本文恭の弟と店員が帰国するので送別会を日本人会が開いたという記事である。それから半年後の1910年1月15日号に「昨年5月にボストン日本人会が設立された、総員50余名」という記事が出ているから、この送別会が最初の会合だったのが分かる。ついで1月14日に新年会を開き、2月13日には上記のように菊池男爵の歓迎会を開くなど定期的に活動している。

この頃の会長は高場四郎という雑貨商店主であったが、1910年5月21日に役員を改選して次のように決めている。

会長・山中繁次郎（山中商会三代目吉兵衛の姪・千代の婿、ボストン支店長）

幹事：森三郎

会計・八橋春通（山中商会）

顧問：松本文恭（美術商）、西浦芳太郎、高場四郎（雑貨商）

評議員：原善太郎、山下富太郎、益田信世、橋与市（医師）、鈴木岩三<ママ、正しくは岩蔵>、中村寛二

ここで（）内は把握できた職業である。ボストン日本人学生会のメンバーである益田信世

と鈴木岩蔵が評議員になっている。

山中商会はニューヨークやロンドンにも店を持っていた日本の美術品を扱う大手の商社であった。

八橋春通¹⁾は当初は山中商会の社員であったが、太平洋戦争で山中商会が閉店した後の大戦中にボストンで美術商を自営し戦後も活躍した、その傍ら日本人と日系人のリーダー役を長年務めた、留学生の世話をした。

松本文恭²⁾は明治末に渡米してモース博士の世話で地元の高校を卒業してから美術商として成功したことで知られている、そして一時期ボストン日本人会の中心メンバーであった。

なお現在のボストン日本人会は戦後新規巻きなおしで再開した。しばらくの間は留学生が中心メンバーであったが、企業の進出で社会人が参加するようになり、今では社会人の方が多くなっており学生とともに活動が続いている。

(b-2) 日本人倶楽部

1912年にボストンに日本人倶楽部を創設したという記事が『日米週報』に出ている、その関係者として影山千萬樹、鈴木岩蔵、橘与一、谷原善太郎の名前が挙がっている。ニューヨークに日本人倶楽部が先行して活動しており図書室を持つオフィスを持っていたので、類似のことを目差したようだがどのような活動をしたのかはその後の記事に出ないこともあり不明である。なお影山と鈴木はボストン日本人学生会のメンバーであり、橘(医師)と谷原(受負業)は在留邦人である。

(b-3) 日本の大学を卒業した人の集い

早稲田大学と慶応大学は卒業生がボストン早稲田校友会とボストン三田会という名称で時折活動している。両校とも同窓会報(『早稲田学報』、『三田評論』)に記事が出ているほか早稲田については『日米週報』にも取り上げられている、その最初の記事は1909年11月27日号であり同月19日に下記のメンバーが出席したと書かれている。

望月松太郎、影山千萬樹、中村貫三、熊谷綱太郎、吉田長太郎、横山有策、坪内士行、太田和鶴之助、瀧山良一。

望月、影山、瀧山は上述した、このほかにボストン日本人会の記録に出ているのは横山有策と坪内士行である。坪内士行は坪内逍遙の甥で宝塚音楽学校創立に参画した、早稲田大学教授であり女優坪内みき子の父である。横山有策は早稲田大学英文科教授となり、坪内逍遙の後を受けてシェークスピアを講じた。ボストン日本人会の記録に出ない中村貫三、熊谷綱太郎、吉田長太郎、太田和鶴之助は不詳である、学生でなかったのかもしれない。

当時、ニューヨーク、シカゴ、サンフランシスコなどでも早稲田校友会があり、さらに米

1) 『米国日系人百年史 在米日系人発展人士録』新日米新聞社、1961

2) 「日美法師—松本文恭—のこと」村形明子、pp. 3-17、浮世絵芸術、通号 66、1980

国東部校友会聯合などもあった。

慶応大学はボストン三田会として活動していたことが日本側の記録にあるが日米週報の記事に見当たらない。早稲田と慶応のこの活動は現在も続いている。

(c) ハーバード大学に日本から客員教授

1911年2月24日の例会の記事録に次の一文がある。

Prof. Woods and Hon. E. H. Walcott were our guests and they explained their plan of establishing a permanent Japanese professorship at Harvard University.

ウォルコットは何度も出てくるがボストン駐在日本名誉総領事である。ウッズ (Woods) はハーバード大学で仏教を講じた教授である。この記事は日本からの客員教授がハーバード大学に常任となることを伝えている、そして実際に着任したのは東京帝国大学の姉崎正治教授である、着任については後述する。

(d) 最初の晩餐会

最初の年会は1911年5月26日に晩餐会として開かれた。記録集に次のように英文で書かれている。

The First Annual Dinner

The first Annual Dinner of the Club was held on Friday, May 26th at the Hotel Somerset.

There were at dinner 6 active, 2 associate and six honorary members.

The toastmaster was President Arai and the speakes(sic.) were Hon. E. H. Walcott, Dr. P. W. Ross, and Mr. Y. Ichihashi.

The dinner was a great success.

出席者は正会員 6 名のなかで名前が分かるのは新井会長のほか市橋倭 (ハーバード大学で博士号を取得、スタンフォード (Stanford) 大学教授、アメリカの市民権取得) である。名誉会員で名前が分かるのは乾杯の音頭をとった在ボストン名誉日本総領事のウォルコットとハーバード大学のロス (Ross) 教授 (美学) である。

なお一年前の1909年5月1日の例会で晩餐会の会費を審議して次のように決めている。

会員は金貳弗を以て最高額とす。名誉会員より会費を徴せず。月定会費積立金を以て、若しくは正会員これを支弁するものとす。

さらに晩餐会の前月の例会(1909年4月12日)で次のように個人からの会費のほかに本部から\$25 醸出すると決めている。

It was decided that \$25 should be sent from the Club's treasury and that the rest of the expenses of the Annual Dinner should be paid by members who are present at the dinner.

金額的には学生らしく慎まじやかな晩餐会だったようである。なお正会員と準会員の差が参加費に見えているが、ハーバード大学の留学生は経済的に恵まれた人が多かったためか

もしれない。

(e) コスモポリタン・クラブ

ハーバード大学や MIT などには海外からの留学生で構成されるコスモポリタン・クラブ (Cosmopolitan Club) があった。1909 年 6 月 4 日の例会の議事録に「コスモポリタン・クラブ大会に要せし総費用 金十二弗八十五仙の内 金六弗は出席者より(一名一弗ずつ割)支払い、残額は当会積立金中より支払ふことに決す」とあるのが最初の記事である。

1909 年 4 月 29 日付のハーバード大学の構内紙クリムソン (The Harvard Crimson) は、5 月 12 日に同クラブの年次晩餐会が開かれてエリオット (Eliot) 学長と日本の高平男爵 (駐米日本大使) がスピーチをすることになっていると予告しているので、そのときの費用の支払い方をこの例会で決めたのが分かる。なお、このとき高平大使は日本政府から指示で Eliot 学長に勲章を渡すための使者としてハーバード大学を訪問した。

さて 1911 年 12 月 8 日の議事録に “Mr. Suzuki informed the members that the cosmopolitan Club was to have a Japanese night. After a short discussion it was decided to leave the matter until further investigation.”と書かれている。MIT に留学していた鈴木岩蔵がハーバード大学の留学生に初めて報せたので驚いたようである。

翌年の 4 月 25 日付の MIT の構内紙(The Tech)に書かれているのだが、コスモポリタン・クラブが 5 月 1 日に「日本人の夜」 (JAPANESE NIGHT) と称して日本人留学生による和楽器の演奏と柔術の実演などを MIT で行ったのだが、これが前年末に決まっていたことを当事者の鈴木が承知していたというわけである。

なお特別の計らいで、この催しは学内関係者が誰でも参加できることになったが、そのプログラムが MIT の構内紙に次のように紹介されている。

Introductory members	Ewazo Suzuki
Bushido, the Soul of Japan	K. Goto
Samisen Music	S. Tsubouchi
Illustrated Lecture	E. Suzuki
Biwa Music	K. Goto
Jiu-jitsu and fencing	Messrs. Ito, Goto, Kageyama and Miyoshi

鈴木岩蔵、後藤兼三、坪内士行、影山千萬樹は既に名前が出てきたが、Ito と Miyoshi は初出である、そして消息がつかめない。ちなみに Ito は東京の警察で柔術を教えていたと書かれている。

坪内はハーバード大学の留学生であり、影山はボストン大学への留学生なのでコスモポリタン・クラブは連携して活動していたのが分かる。

なお明治期には薩摩琵琶を演奏する士族が居たのが知られている、後藤もその一人だったのだろう。ところで坪内の三味線は我流だったようである。

(f) ベル・ボーイから教授になった谷川義男

1909 学年度の第一回会議（1909 年 10 月 16 日）の来賓として招かれた谷川義男(Yoshio Tanikawa)は日米の新聞で取り上げられている。先ず明治 42 年 6 月 22 日付の讀賣新聞は「日本学生の名誉」という見出しで「津市の生まれ。1905 年に渡米しミネソタ州セントポールの中央高等学校で社会学と心理学を 3 年間学んだが成績優秀なので推挙されてハーバード大学の特待生に選ばれた」とある。

次に 1911 年 6 月 13 日付のニューヨーク・タイムズ (New York Times) は“Bell Boy Now a Professor”と題し、さらに副題を“Young Japanese Gets Degree From Harvard, and Honors in Japan”として「ボストンのあるホテルでベル・ボーイをしていた谷川義男がハーバード大学で修士号を取得して京都の大学で哲学の教授になる」と書いている。

谷川は大正 3 学年度に市立大阪高等商業学校の教授嘱託として英語を担当したことが名簿で確認できるが大正 4 年度の名簿には出ておらず、その後の活動は不明である。

これまで見てきた留学生は財閥の一門の人や軍関係者など学費の心配の無い留学生が多かったが、ベル・ボーイをしながら苦学した人も居たわけである。

(f) 第 3 代目の会長 鈴木謙吉

1911 学年度の 4 度目の例会(1912 年 5 月 26 日)で新井会長に代わって鈴木謙吉を 1912 学年度の会長に決めた。鈴木はオハイオ州のウェスリアン大学 (Wesleyan University) で 1910 年に学士号を取り、続いてボストン大学とハーバード大学で英文学と英語学の学士号(1913)を取得した。帰国して長崎の活水学園で英語を教えたが、同校はウェスリアン大学の卒業生である宣教師エリザベス・ラッセルが創設しており両校は姉妹校である。日本で最初の女性の大臣である中山マサは活水を卒業してからウェスリアン大学に留学し、大正 5 年から 7 年刊母校で教鞭をとったので鈴木と同僚だった。鈴木は同校を大正 7 年に退職するが、昭和 22 年に副校長となって復職した。

5. 第一次活動停滞期(1913-1916 学年度)

記録集に 1913 学年度から 1915 学年度までは活動の記事がないが各学年度別に名簿が出来ている。1916 年度の名簿は見当たらないが、年度末に近い 1917 年 5 月 4 日に会合を開いており 27 人が参加者名簿にローマ字で名前と現住所を書いている。この会合に出なかった人が居たかもしれない。

人数を数えると 1913 年度は 10 人、1914 年度は 20 人、1915 年度は 32 人、1916 年度は 27 人である、この中には複数年に重複して出ている人が含まれている。

第一次世界大戦のために欧州への留学ができなくなったわけだが、それゆえにボストン地区への留学生が急増したことがこのように数字の上で確認できる。このことを踏まえて『日米週報』の 1915 年 8 月 21 日号は「此一時的現象が故国の官民に米国の民情及び米国と欧州との異なりたる国体を理解せらるる上に利益あるべく従って将来日米間の問題を解決するに大なる助力となるべき事と期待致居候」と書いている。当時西海岸では排日運動が吹き荒れていた。人的な交流が増えることで良い方向に向かうことに期待を込めていたわけである。

5.1 日本人初のハーバード大学の客員教授 姉崎正治

上述したように 1911 年 2 月 24 日付の議事録にハーバード大学に日本講座が開設され、日本から教授が赴任してくることになったと記されている。念のために記事を再録する。

Prof. Woods and Hon. E. H. Walcott were our guests and they explained their plan of establishing a permanent Japanese professorship at Harvard University.

ここでウッズ (James Haughton Woods) はハーバード大学の仏教学を講じた教授であり、ウォルコットはボストン駐劄名誉総領事であった。この講座の正式名称は The Professorship of Japanese Literature and Life であり、日本人として初めて着任したのは姉崎正治 (東大教授) である。

姉崎の 1913 学年度の講義がハーバード大学の構内紙クリムソンに Art and Life in Japan というタイトルで出ており、下記の 4 回の講義である；

Japanese Art, a General Survey

The Imperial Court Life and Art

The Warrior's Life and Art

The People's Life and Art

1914 学年度は Representative Figures in the Religious History of Japan というタイトルであり、下記の 4 回の講義である。

The Introduction of Buddhism and the Buddhist Statesmanship of Prince Shotoku

A Social Catastrophe and the work of a Pietist Saint

The Mongol Invasion and a prophet of Japanese Buddhism

Religious Movements in Modern Japan

これらの一覧の講義は市民にも公開されており、実際に聞いた人が居た。当時バードランド・ラッセル (Bertrand Russell) も客員教授であったが講義の案内が並んで出ているのが興味を引く。

姉崎はこのような大学での講義のほかにもボストン美術館で学生のためにギャラリー・トークを行っている、その一例が 1914 年 12 月 19 日付の構内紙に次のように出ている。

Professor M. Anesaki will hold a conference on Japanese art at the Boston Museum of Fine Arts tomorrow at 1 o'clock.

この文に続いてハーバード大学の学生なら誰でも参加できると書かれている。

また姉崎はハーバード大学で開かれた次のような会議でも講演をしている。

・ 1914 年 1 月 14 日

The American-Japanese conference で講演。Eliot 学長、Morse 博士も講演

・ 1914 年 3 月 7 日

大学院生のために特別講義 “A Variety of the Buddhist Religion”

・ 1914 年 3 月 21 日

The Christian Association の会合で “Buddhism and Christianity in Modern Japan” の演題で講演

・ 1915 年 1 月 22 日

Philosophical Club で “The Tendai Buddhist Conception of Reality” の演題で講演

なお姉崎が寄贈した書籍がハーバード大学の燕京図書館の日本語図書の出発点となっている。また姉崎の在任中にコンコーディア協会の東京支部が 420 巻から成る大蔵経（弘教書院、明治 14-18）を寄贈したことが構内誌でも大きく取り上げられている。

このような諸活動が評価されたためであろう、ハーバード大学創立 300 周年にあたる 1936 年に名誉博士号を授与されている。

5.2 姉崎正治の盟友ウッズ (Woods) 教授

日本からの客員教授のことを留学生に伝えたウッズ教授は姉崎正治とドイツ留学中に知り合っていた。仏教を漢訳からではなくサンスクリット語から直接学ぶことを目的にその研究が進んでいたドイツに姉崎は留学したが、そこで知り合いになったウッズに仏教を紹介した。二人は下宿先のルームメイトとなってサンスクリットを学び、一緒にインドへ留学した仲だった。ハーバード大学で再会したウッズと姉崎は生涯にわたり公私両面で親交を深めていったことで知られている。

さて日本ボストン会は 2007 年 5 月に三井寺法明院（大津市）に参詣した。境内にフェノロサ (Ernest Fenollosa) の墓とビゲロウ (Bigelow) の墓に詣でるのが目的であった。日本ボストン会・会員の山口静一（元日本フェノロサ学会・会長）が案内役を務めた。

ビゲロウの墓域内に「東西文化のかけ橋ヨーガストラ学者の師父ジェームズ・ウッズ博

士供養塔」という墓銘碑があった。この碑にウッズは岸本英夫の恩師であると書かれていた。ウッズはハーバード大学で哲学を担当し部門長ともなった人であるが 1935 年に仏教の研究のために来日したが東京で急逝した。ウッズもフェノロサとビゲロウのように三井寺で受戒した仏教徒であったので形見の品を入れた供養塔をこの地に岸本が作ったのだった。なおウッズの供養塔がビゲロウの墓域内にあるのは、ウッズがビゲロウから仏教関係の資料を引き継いだ後継者だったためだからだった。

ところで岸本英夫の夫人の三世は姉崎教授の長女である。岸本と巖父・能武太（明治時代にハーバード大学に留学）はともに高名な宗教学者であり、親子二代の 3 名がウッズと同じ学問分野で研鑽したのだった。

なお岸本英夫は昭和初期にハーバード大学で日本論（日本語入門、日本文化史、日本の宗教）を担当しており、ボストン日本人学生会の記録に署名を残しているので後述する。

フェノロサやビゲロウ、そして姉崎とウッズ等は遠い歴史上の人物と思っていたが、ボストン地区留学生の記録を通して法明院で生き返った思いがした。この日は強い雨が降りしきっていたが、温かいものを感じていた。

5.3 ボストン日本人界の活動

『日米週報』が 1915 年 1 月から 1916 年 10 月までに取り上げたボストン関係の記事が手に入った、留学生の記録が少ない時期だけに興味を引く。その中から主な記事を紹介する。

(a) 新年会

1915 年 1 月 30 日（土）にボストン日本人会の親睦会が開かれた、新年会である。来会者 20 余名であり会場は平岡氏方になっているが、大人数なので当時ボストンで洋食店を経営していた平岡辯蔵の店であろう。

医師の橋（与一／与市）が司会をし、森太三郎（山中商会）とタフト大学で神学を学んでいた折戸（忠作）が開会の挨拶をしている。留学生の記録に折戸は 1918 年になって登場する。

(b) ボストン日本人会の再興と大正天皇即位祝賀会

1915 年 10 月 30 日付の『日米週報』にボストン日本人会の再興後第一回定期総会を 11 月 6 日（土）に開催するとの予告が出ている。上記のように 1 月に新年会を開き、9 月 12 日（日）に例会を開いたという記事があるのだが、この総会を機に予告している「天長節および御即位祝賀会」を大々的に行うために新規巻き直しをしたと考えられる。

さて定期総会から間をおかずに 11 月 24 日（水）にボストンのホテル・コプレプラザで御即位祝賀の菊の会が開かれた。参会者はアメリカ人の招待客を含めて 300 人以上という盛会となった。

前駐日米国大使夫人（Isabel Anderson）、親日家ケネディ夫人（Frances Blackler

Kennedy)、ハーバード大学の学長夫人(Anna Parker Lowell)の3人がパトロネス(女性のパトロン役)を勤めている。

アメリカ側の主な参加者は次の通りである。

MIT 学長(Richard Cockburn Maclaurin)夫妻、ビゲロウ、タフツ学長(Hermon Carey Bumpus)、前ブラジル日本公使(E. S. De Lima)、女性詩人(Amy Lowell)、ハーバード大学のウッズ・モース・モア(Moore)・フォリン(Follin)・ピーボディ(Peabody)各教授、前大使館附武官ホーソン大佐

ボストン美術館の日本美術品の多くはビゲロウの寄贈によるものだが、学生会の記録に出てこないのが不思議だった。ここでビゲロウは2番目に名前が出てくるのだから当時でも知る人ぞ知るということだったようだ。これからほどなくしてビゲロウは病に倒れたので対外活動を控えたのだった。

日本人で招待された人の多くがボストン日本人学生会の記録に出ている。『日米週報』に書かれている順に名前を挙げると下記の人々である。

服部宇之吉、西崎勝之、秦常造、平岡通也、今岡信一良、保井コノ、高松孝治、栗山重信、橋本賢輔

服部は姉崎正治の後任として1915年から1916にかけてハーバード大学の客員教授となり儒教を講じた。西崎は海軍少佐でありMITで電気工学を学んだ、秦はハーバード大学とMITの両校の協約のもとに両校で電気工学を学んでいる、平岡はMITで鉱山学を学んだ、今岡はハーバード大学で哲学を学んだ、保井は日本人初の女性の博士でありハーバード大学で石炭を研究した、高松はハーバード大学で神学を学んだ、栗山はボストン大学で医学を学んだ、橋本はMITで飛行機を研究した。

この菊の会の実行委員長は山中繁次郎(山中商店支店長)で、松木文恭(美術商)が幹事で、委員は寺田修、川崎吉兵衛、西崎勝之、鶴岡松之助、村田幸太郎、富田幸太郎であった。

前奏の琴の演奏は留学生の平野チエ子だった。ついで松木の娘カサリン(不詳)が能を演じ、さらに親子で謡いを披露したあと、松木の長女ツヤ(母親はアメリカ人、父の帰国後も残留)がピアノを演奏した。

これに続いて、ちょうどボストンで公演中だったオペラ歌手の三浦環がボストンで評判になっていた桜と蛍を独唱し、さらにアンコールに応じて共演者のマーチン(Riccardo Martin)とともに蝶々夫人の一節とアベマリアをイタリア語で熱唱して大喝采を浴びた。またボストン・オペラのプリマドンナであるテイト(Maggie Teyte)と競演の女性歌手もそれぞれ独唱して会場は熱気に包まれた。

服部博士の音頭で大統領と天皇陛下に万歳を三唱して中締めとし、最後に日米人が手を取り合ってダンスを踊って散会した。日本人がボストンで行った空前の大イベントとなった。

(c) ボストン市同仁協会

『日米週報』の1915年10月9日号はボストンの在留邦人のためにキリスト教を宣伝する目的で日本人同仁協会が発足したと報じている。タフツ大学神学部長 マッコレスター (Lee S. McColleston) や山中繁次郎などの在留邦人の支援を得たという。

実は8月末に若林が自宅でバイブル研究会を発足させていたのだが、タフツ大学で神学を学んだ折戸忠作が参加して再編成したのがこの同仁協会である。日曜日の夜に在留邦人の若林三之助宅で礼拝説教をし、場所を変えて文学会と茶話会を定期的に行うがいずれも参加費は取らない。将来は日本人のための教会を作るのを目差したという。

なお10月24日にマッコレスター臨席のもとに発会式を行った。このとき音楽学校に留学していた阿部正義がピアノを演奏したが、阿部は賛美歌「馬槽のなかに」の作曲者である。このほかの留学生として寺田脩、橋本賢輔の名前が見える。

このように活動は続くが、『日米週報』の1916年4月1日号は「未だ会規さえ出来上らず社会的事業乃至伝道云々と其名の徒に美はしく何らの熱情と同情と常識に欠け」と手厳しく批判している。その後の状況は不詳だが、ボストン界限にある日本人のための教会の存在を知らない。

(d) アメリカ人からの招待

上記の大正天皇即位祝賀会の返礼のようにアメリカ人から招待された記事が『日米週報』に続いた。

先ず12月3日(金)に上述の親日家ケネディ (Harris Kennedy) が三浦環夫妻、服部宇之吉、西崎勝之を初めとする留学生をボストン郊外の自宅に招待した。ここには日本庭園があり、日本風の茶菓を饗応した。

12月12日(日)には前駐日米国大使のアンダーソン夫妻 (Larz & Isabel Anderson) が日本人留学生を招待してパーティを開いた。このとき夫人の友人の女美術家に来ていたという、名前が書かれていないが岡倉天心との交流で知られる近在のガードナー夫人 (Isabella Stewart Gardner) と考えられる。

『日米週報』は、このような交流を好ましく捉えている。これまでは役人や学者を連れてきて紋切り型の演説をしてその場限りの外交儀礼の交換をやってきたが効果が疑わしかった。アメリカ人と肩を並べてやっていくには信念の修養が第一であるという意味でこのところのボストン地区の日本人の活動振りを高く評価して「何時か花咲き実を結ぶ秋が来るべくと期待する」と論じている。

(e) 聖路加病院新築費の基金のための園遊会

『日米週報』の1916年5月20日号に前駐日米国大使夫人イザベル(Isabel Anderson) が中心になって日本の聖路加病院が新築するのを支援するために基金を募るために自宅でパーティを行ったことを報じている。夫人は莫大な遺産を相続したことで知られる資産家だが、自分が醸出するだけではなく賛同者を広く募って社会的な事業を目差したのだ。イ

タリア式の自宅の庭に三千人を集めたという。

このパーティにボストン日本人会は全面的に協力した。通常は表に出ない夫人の名前が次のように出ている。

マウント・ホリヨーク (Mt Holyoke) 女学校の三浦嬢、シモンズ(Simmons) 女子大学の平野千恵子、石川栄子、若林光子、野依俊子、重本夫人、鶴岡夫人、村田夫人
三浦嬢はマウント・ホリヨークを1919年に優等で卒業した Shigeyo Miura Tomita であろう。平野は後にボストン美術館の学芸員になった。石川は後述するが留学生の面倒を見た在留邦人である。若林は同仁協会の三之助の夫人、その他は消息がつかめないが、このような大規模なパーティは女性の支援が不可欠である。

日本政府は8月17日付でアンダーソン前大使夫人 (Isabel Anderson) を叙勲している。それに先立つのだが夫君の日本在任期間は2ヶ月ばかりであったが帰国に際して日本政府は叙勲している。帰任後も日本に対してこのような好意的な活動を続けたからであるが、夫妻そろっての叙勲は珍しいことだろう。

(f) ボストン市同仁協会の茶話会

ボストン市同仁協会が茶話会を定期的におこなっていたことを上述したが、欧州留学を終えてボストンに立ち寄った法学者・穂積重遠が1915年12月16日と28日の茶話会に参加したことを著書に書き残している¹⁾。そして16日の茶話会でイギリス留学のときに体験した「専門家講話会」を紹介したところボストンでもやろうということになり、その初回の講師役を28日に務めることになったという。

その前日の27日に実はボストン郊外のセーラムに住むモース博士に招かれて泊りに行っているの、先ずそのことから記す。ちょうどセーラムへ講演に行く服部宇之吉(姉崎正治の後任でありハーバード大学で儒教を担当)と保井コノ(植物学者)と一緒に出かけたが、モースは穂積重遠の厳父の陳重と親しかったので歓待を受けている。日本の陶器のコレクションなど昔話に花が咲き、校正に入っているモースの著書“Japan Day by Day”のゲラを見たり、ダーウィンの直筆の手紙を見たりして老学者のたゆまぬ研究活動に感銘を受けている。翌28日午前中にモースの案内でピーボディ博物館(現在の Peabody Essex Museum)に行き、博士の寄贈品である日本の風俗習慣に関わる数々の品を見学し、ボストン美術館の日本美術品より優れていると書き残している。

帰ってきた夜に同仁協会の茶話会で「結婚手続の話」として挙式届出同日主義を穂積が論じた、活発な質問があつて面白かったとの感想を残している、出席したのは次の人々だった。

服部博士(支那哲学)、石崎少佐(海軍)、橋本工学士(飛行機)、八木工学士(電気)、寺尾農学士(植物遺伝学)、高柳法学士(英米法)、生源寺工学士(機械)、今岡文学士(宗教哲学)、柳原牧師(神学)

石崎以外の人々が『ボストン日本人学生会の記録』に出ているので、石崎少佐は西崎少佐の

¹⁾ 『欧米留学日記』穂積重遠、岩波書店、1997

誤記ではあろう¹⁾。この茶話会がこの後どういう活動を続けたのかは記録が無いので分からない。

なお穂積と高柳と一緒に刑務所を見学して日本の刑務所と設備や待遇にかなりの違いがあることに驚いている¹⁾。

¹⁾ 「ボストンより」高柳賢三、『英語青年』 p. 343, Vol. XXXIV-No. 11

6 活発なアメリカ人との交流(1917-1921 学年度)

6.1 学年度別の主な活動

(a) 1917 学年度

1917 学年度以降のノートに記事録が見当たらず、会合に参加した人が名前と現住所を書き残している。名前は漢字のこともあり、ローマ字だけのこともある。

1917 学年度には 3 回（1917 年 11 月 3 日、1918 年 2 月 9 日、1918 年 4 月 27 日）の会合があり、そのほかに集合写真を撮るために 1918 年 5 月 16 日に集っている。撮った写真を当時シカゴで発行されていた雑誌 “Japanese Student” のために送付している、この目的で写真を撮ったようである。この雑誌とこの写真については後述する。

各会合の参加者数は 30 名前後である。2 回目の会合（1918 年 2 月 9 日）に幹事として次のメンバーの名前が出ている。

龍野 昌之、森 兵吾、高垣 寅次郎、得田 慶市

高木 尚右、斎藤 甚一、森島 侃一郎

ハーバード大学（高垣、斎藤）、MIT（龍野、森）およびボストン大学（得田）などから幹事が出ている。発足当時はハーバード大学が会を牛耳っており他校への留学生を準会員としていたが、留学生の数が増えて留学先の大学も多様になったために留学先大学で会員を区別しては日本人としての一体感が持てなくなったと考えられる。

帰国後、高垣は経済学者（一橋大学教授）、森は工学者（九大教授）、森島は陸軍軍医、高木は陸軍技師、龍野は実業界、得田は医者になった、なお斎藤は慶応義塾卒だが経歴は不詳である。

1917 年 4 月 27 日の会合で 1918 学年度の委員を次のように決めている。

Technology	三戸由彦、橋本賢輔
ハーバード大学	堀内弥次郎、清水武雄、土方成美
New England Conservatory of Music	平岡次郎
ボストン大学	杉村一枝

幹事団に初めて女性が入った、杉村一枝（英文学者、早大教授）である。

MIT は当時 Boston Technology と称し、略して Technology あるいは Boston Tech と呼ばれていた。三戸と橋本は海軍技師である。堀内は医学者、清水は物理学者（東大）、土方は経済学者（東大）、平岡は作曲家である。

(b) 1918 学年度

1918 学年度は 2 回（1918 年 11 月 2 日と 1919 年 3 月 22 日）の会合があり、1919 年 4 月 5 日に写真館で写真を撮っている。

名簿で総員は 84 名だと書いているが、1919 年 3 月と 5 月の日付のついたタイプライターで打ち出した名簿が 2 種残っていて前者に 74 人、後者に 79 人が載っている、二つを比べるとかなりの出入りがあるのは聴講生などで移動が結構あったためと考えられる。また名簿には一例として Mitsukuri (Mr. & Mrs.) と夫人のことを書いている人があり、一方書いていない人もあるのが数が合わない理由である。

(c) 1919 学年度

(c-1) ハーバード大学の日本人会

この学年度は活発な活動が行われており、その記録は第 2 巻と第 1 巻に書き分けられている。ただし第 2 巻の記事はハーバード大学の日本人会としての記録であり、9 月 27 日から 11 月 8 日までの 1 ヶ月半の間に以下のことが書かれている。

- ・ 9 月 27 日：準備会を開き、正会員をハーバード大学と MIT の生徒と卒業生とし、他の大学関係者を準会員と再定義した。
- ・ 9 月 29 日：シカゴ大学の加藤勝治（医学者）が来訪したので茶話会を行ったが 15 人が参加した。後述するが加藤は留学生向けの定期刊行物の編集者であった。
- ・ 10 月 4 日：欧州経由でやって来た海老名弾正¹⁾夫妻の放談を楽しんだ、参加者 33 人。新役員として越智孝平（海軍少将、松山市長）、福沢八十吉（福沢諭吉の孫、慶応義塾・社頭）、高木彌直（不詳）を決めたが、役割分担は書かれていない。
- ・ 10 月 23 日：Dr. & Mrs. Leslie（神学者）が日本人学生のための講話をし、越智孝平、福沢八十吉、高木彌直と増原退次（医師、不詳）が出席した。
- ・ 10 月 25 日：姉崎博士の講話。40 人が聴講、この中に MIT への留学生も含まれていた。
- ・ 10 月 26 日：MIT の学生と打ち合わせて、マサチューセッツ州内の全ての日本人留学生を含めた活動にすることで同意。その組織化を討議した。
- ・ 10 月 28 日：中国人学生会の Wei 会長と面談。双方の茶話会に代表者が参加することで合意した。
- ・ 11 月 8 日：第一回茶話会を開催したが、出席者などの記事は無い。

(c-2) アメリカ人との初めての茶話会

第 2 巻の後半はアメリカ人を招待して茶話会を開くための招待者リストである。第 1 回目の茶話会は 1920 年 2 月 20 日、第 2 回目は 1920 年 11 月 12 日、第 3 回目は 1921 年 11 月（日にち不明）、そして第 4 回目が 1922 年 4 月（日にち不明）である。

第 1 回については「*Feb. 20, 1920 の After Noon Tea に発送せし Invitation*」と書かれたページがあるが招待者リストが見当たらない、この文の前の 4 ページに 1920 年 11 月 12 日の茶話会の招待者リストが出ているので、これと同じものかもしれない。

¹⁾ 「軍国主義を排す」 Japanese American Commercial Weekly, 大正 8 年 11 月 15 日号

このリストに出ている日本人は O. Ishikawa と Yatsushashi の二人であり、当時の日本人会の様子から石川栄子（オエイさん、雑貨商）と八橋春通（山中商会ボストン支店長）と見なせる。

第3回目の茶話会（1921年11月）と第4回目（1922年4月）の茶話会の招待者リストには1921年10月28日付と1922年4月1日付で招待客の参加の可否が書き込まれている。招待する理由を注釈（Remarks）として書いてある、たとえばマッコレーイ（Clay McCauley）について“*Lived in Japan for a long time and is well known among the leading Japanese*”と書いている。なおこのリストに出ている日本人は Mrs. & Miss Nishimiya だけである、当時の事情から西宮ハナと娘のチトセとみなせる。ハナは伊藤博文を手伝うために同道してきて住み着いた人だと都留重人が回想している¹⁾。

第1回と第2回の招待客は総数で78名であるが、実際に出席した人の数は不明である。第3回と第4回の招待客の総数は69名であり、出席すると回答した人の総数はそれぞれ41人と30人である。

招待客のリストは第1回、第2回と第3回、第4回の2種あるが、両方に共通して出ている人は17組26人である。留学生の異動で付き合っている人が変わったせいであろう。

(c-3) ボストン日本人学生会の集会

第1巻に次の記事が出ている。

- ・1919年12月20日 忘年会と思える会合に24人出席
- ・1920年5月15日 17名が参加した春季会合。

次期役員として河合諄太郎（MIT、早大教授）、増原退次（ハーバード大学、歯科医）、鈴木健輔（ボストン大学、帰国後の動向は不明）を決めている。

なお本学年末にあたり1920年6月19日に32名が出席して写真館で撮影した。

(d) 1920学年度の活動

(d-1) ハーバード大学の日本人会

第2巻に下記3回のハーバード大学日本人学生会の記事がある。

- ・1920年10月11日に会合があったことだけ書かれている、参加人数などは不明。
- ・1920年10月31日に“Mr. Shimazu and Mr. Eelton, Secretary of Committee of Friendly Relation with Foreign Student spoke.”という記事があるのみだが、この会談の内容は書かれていない。また Mr. Shimazu は、他の記事にある Shimadzu と同一人物かもしれないが、どちらにしても不詳である。
- ・1920年11月3日の会合で11月20日に開催する茶話会への招待者の確認。

(d-2) アメリカ人との二回目の茶話会

¹⁾ 「先学訪問 21世紀のみなさんへ 02」都留重人編、(社) 学士会、2006

1920年11月20日にアメリカ人との第2回目の茶話会が開かれたが、その状況は書かれていない。

茶話会の招待者から主な人(10人)を以下に記す、実際に出席したかどうかについては記されていない。

Cyrus Edwin Dallin ポストン日本協会会長、彫刻家

John Lincoln Dearing 横浜バプテスト神学校・校長

Charles W. Eliot ハーバード大学教授、後に総長

Edward Leads Gulick 青い目の人形運動のSydney Lewis Gulickの弟

Harris Kennedy ラフカディオ・ハーンの研究家、親日家

A. Lawrence Lowell ハーバード大学総長

Edward Sylvester Moose 元・東大教授

Clay MacCauley 本アジア協会副会長(1912) 日米協会会長

Edward B. Watson ポストン駐在名誉日本総領事

James Haughton Woods ハーバード大学教授、宗教学者

なお在留邦人も招待されている、留学生の親代わりになった人々であるので後述する。

(d-3) ポストン日本人学生会の集会

- ・1920年10月23日に21名が参加して秋季例会を開催。
- ・1921年4月7日に13名が参加して春季例会を開催。

学年度末の1921年6月10日に15名参加して写真館で撮影した。

(e) 1921学年度の活動

前学年度との違いはハーバード大学の留学生だけの集会についての記事は見当たらないことである。

(e-1) ポストン日本人学生会の集会

- ・1921年10月3日に16名が参加して秋季例会を開催。
- ・1922年4月15日に18名が参加して春季例会を開催。

(e-2) アメリカ人との三回目の茶話会

名簿から分かる主な人々で第二回目茶話会に出ていない人5名を以下に記す。

Roger W. Babson バブソン(Babson)大学創設者

Ralph P. Bridgman 日本の中学で英語を教えた。

David M. Cheney 親日家のタフツ大教授

James Ford ハーバード大学教授で日本人学生のアドバイザー

Horace Packard 親日家の米国ポストン大学教授(内科)

モース (Morse) 博士から高齢のため欠席するとの連絡があった。

6.2 主な出来事、主な人

(a) ハーバード大学で学んだ山本五十六

ボストン日本人学生会の記録を見た人が一様に言及するのが大正八年十二月二十日に開かれた会合に参加した山本五十六が書き残した署名である。他の人々の署名とともに図 6.1 に示す。

このページの先頭に「大正八年十二月二十日午後六時 145 Worcester St.にて開会」とあり 24 人の参会者が自分の名前を書いている。

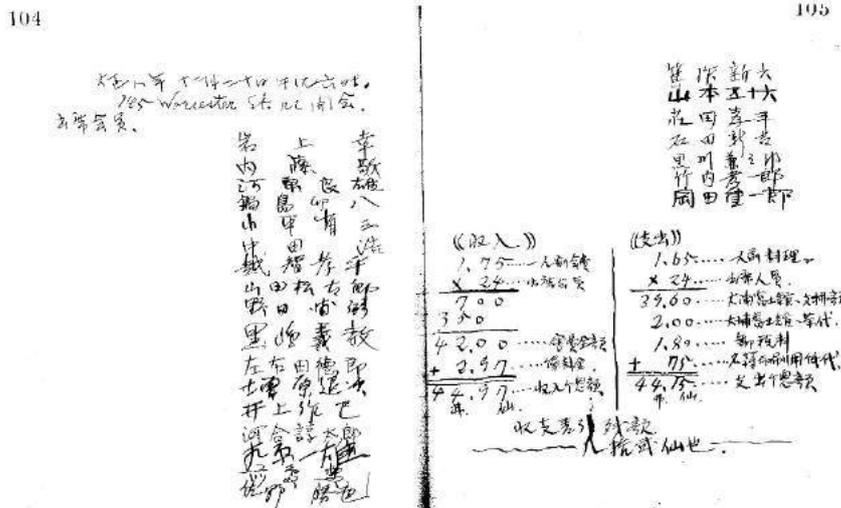


図 6.1 山本五十六が参加した会合(大正 8 年 12 月 20 日)の出席者名簿



図 6.2 山本と竹内

後段にこの日の会計が書かれており、会場(145 Worcester St.)は日本料理店の大浦富士館であった。なおアメリカでは禁酒法が 1919 年 10 月に禁酒法が成立していた、参加費が一人あたり 1.75 ドルと安く上がっているのはそのためである。

この会合に参加した竹内孝一郎は山本五十六と同じく海軍に勤務していた、山本が先にボストンに来ていたのだが竹内が到着した 1919 年 9 月 9 日にボストンでは警察官がストライキを行うという歴史に残る大事件があった。治安を心配した山本が竹内を駅まで迎えに出た。図 6.2 は当時の山本と竹内である。

ところで山本五十六は海軍中佐に任官したばかりだったが、集会から旬日経った大正九年一月一日付の「任務実行に関する報告」に次のように書いている(読みやすさのために旧漢字を新漢字に変え、カタカナ書きだったのをひらがな書きに変えた)。

主としてハーバード大学に在りて語学を修習し併せて一般海軍々事研究の準備として米国歴史、行政、社会組織等の研究に従事せり。会話・簡易用件を弁じ得る程度にして新聞雑誌等は辞書を使用せねば通

読困難なり。

この文面から山本五十六はハーバード大学で単位を取るのが目的でなかったことが推し量れる。聴講生 (Special Student) だったようで大学の記録が見つけれない。

ところで後年の太平洋戦争中のことになるが竹内は海軍関係者が創設した中島飛行機 (株) に勤務した。その工場で小樽高等商業学校の生徒が勤労奉仕していたが空襲を受けて操業できなくなったのに軍事上の理由で帰省が許されなかった。同校の校長の苫米地英俊が駆けつけたが事態を動かすことはできず、生徒との面談もままならぬまま駅に向かったところに生徒がやってきて一悶着あった。事情を理解できぬ生徒達には竹内と校長がボストンでほぼ同じ時期に学んでいたことも知る由もなかったし、二人は懐旧談に耽るわけにもいかなかったことだろう。

(b) 1918 学年度と 1919 学年度の名簿

図 6.1 の右下段に会計計算が書いてあり、それに「名簿印刷用紙代」が含まれている。ボストン日本人学生会のノートのほかに、前学年度にあたる 1919 年 3 月付とこの学年度末にあたる 1919 年 5 月 20 日付の英文タイプで打ち出された 2 つの名簿が残っている。

この 2 つの名簿は 1 学年度の違いだが大幅に人が入れ替わっている。数値で比較すると、1919 年 3 月の名簿には Mr. & Mrs. を 2 人と見なして 75 人出ているが、1920 年 5 月の名簿には同様に勘定して 81 人出ている。この中で両年度の名簿のどちらにも出ているのは 32 人なので、約 6 割の人が入れ替わっている。その理由は主として大学院で学んだ人々だったことと短期的な聴講生が少なからず居たためと考えられる。

なお 1919 年 12 月 20 日の会合に出席した 24 人の中で、1919 年 3 月の名簿に名前が出ているのは 9 人であり、1920 年 5 月の名簿に出ているのは同学年度内なのでやや多くて 16 人である。つまりボストン日本人学生会の会合に参加したのは在学生の 4 割程度である。

ところで苫米地英俊は 1920 年 5 月の名簿に出ているが、山本五十六と竹内孝一郎はどちらの名簿にも名前が見えない。山本は聴講生だったので名簿作成時期に不在だったのかもしれないが竹内は 1919 学年度から学んで MIT で修士号を取得しているのだから名簿に出していない理由は不詳である。

(c) 雑誌を発行した加藤勝治

1919 年 9 月 29 日にシカゴからやってきた加藤勝治のために茶話会を開いている、また撮った写真を加藤に送っていることも上述した。加藤は 1904 年からミシガン州のカラマズー (Kalamazoo) 大学で神学を学んだ、一時期在席していた永井荷風と交流があった。同校を卒業してシカゴ (Chicago) 大学に転じ、1910 年に修士号さらに 1913 年に博士号を取得した。

そして 1916 年 10 月に “The Japanese Students” という雑誌を創刊した、この雑誌は当初は隔月の発行だったが、1918 年 10 月号から月刊になった。この雑誌の副題は「日本人

学生のための雑誌」であった。加藤が編集長でありスタッフはボストンを含む各地のクリスチャンの学生だった、ちなみに創刊時点で柳原貞次郎（牧師）がニューイングランドの代表として名を連ねている。

1919年11月号から誌名を“Japan Review”と変えた、副題は「太平洋時代の先駆性」としたが、その後「日米協調を推進させてゆくことに貢献する」と変えた。文化や思想を介してアメリカ人に日本の理解を高めてもらうことを狙ったわけである。

The Japanese Students 誌は留学中の学生間で情報を共有して親睦を図るのを目的としており、1916年から1918年までの年末号に留学生の名簿を附表にして載せている。アメリカのほかカナダの留学生も含めている。1918年5月16日にボストンで撮影された写真は1919年2月号に掲載された図6.3のようであるが特定できる人は居ない。

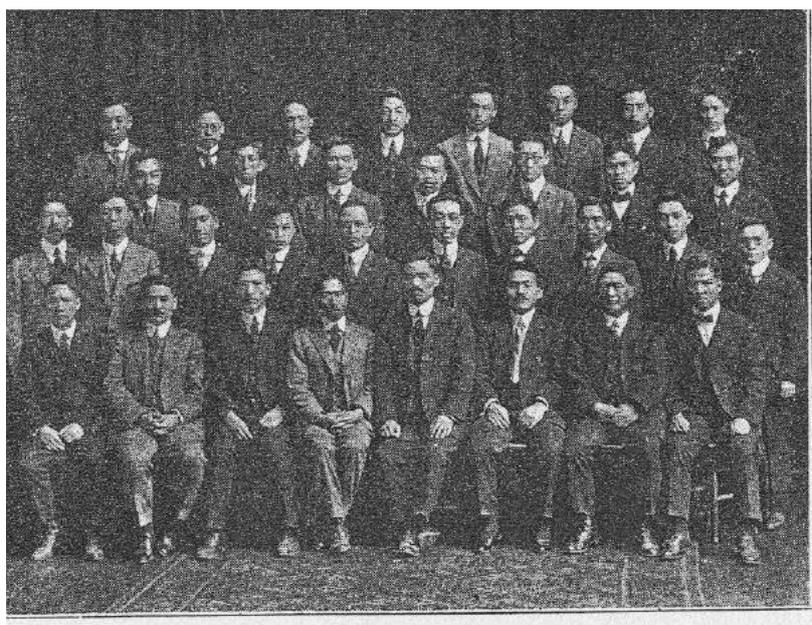


図 6.3 The Japanese Students 誌 1919 年 2 月号に
掲載されたボストン日本人学生

加藤は英文の雑誌を出すことによってアメリカン人の対日理解を深めることを狙っていた、当時とりわけ西海岸で排日運動が激しかったことが背景にある。この目的をはっきりさせるためだろうが、1919年11月号から誌名を The Japan Review に変えて留学生の枠を越えた内容になった。これが留学生の名簿が作られなくなった理由である。

主な寄稿者を気がつくままに記すと、グリフィス (William Elliot Griffis、福井藩お雇い教師)、ランマン (Charles Lanman)、ウィグモア (John H. Wigmore)、新島襄 (同志社大学創設者)、金子堅太郎 (政治家)、海老名弾正 (宗教家)、原敬 (首相)、後藤新平 (政治家)、尾崎行雄 (政治家)、浮田和民 (思想家)、姉崎正治 (宗教学者)、吉野作造 (政治学者)、野口米次郎 (日系詩人)、幣原喜重郎 (駐米大使) など多彩である。本誌の刊行前に他界していた人がいることから分かるように他紙からの引用文もある。

加藤は1918年にシカゴ大学医学部 (Rush Medical College) に進学した、その勉学に多忙になったためだろうが1922年4月号を最後に本誌は廃刊となった。その後、加藤は1924年に医師(MD, Medical Doctor)となり、シカゴ大学で日本人初の助教授となったが、開戦にともない日米交換船で帰国した。戦後は東京医科大学の教授、副学長を務めた。なお1950年に昭和天皇両陛下に輸血に関する御前講演の栄に浴した。1961年に他界した。

なお加藤は『米国大学と日本学生』(博文館, 1918)という本を出した、序文は新渡戸稲造の手に成る。アメリカの大学の制度を詳しく解説しており、また著名な研究者と留学生を紹介していて現在でも参考になる点が多い。

(d) 議員視察団のボストン訪問

ワシントン軍縮会議に先立つ頃に超党派の国会議員団がボストンを訪問した、図6.4はボストンの日米協会との午餐会(1921年7月5日)の写真である。



図6.4 ボストンを訪問した日本の超党派の国会議員団とボストン日本協会の午餐会

団長は政友会の中西六三郎で団員は立憲国民党の浜田国松、憲政会の中武雄などと事務方を含めた12名である。

ホストは日米協会・会長のダリン Cyrus E. Dallin (左側最前列、彫刻家) であり、対面席に中西が見える。ダリンの隣の女性は秘書のシャーウッド (Jesie M. Sherwood) である。80歳を越えていたモース博士(大森貝塚発見者)、元・日本アジア協会会長のマッコレーイ (Clay MacCauley、ユニタリアン宣教師)、同じく元・日本アジア協会会長のレイン (Lemuel H. Lane、ユニタリアン宣教師)、在ボストン名誉総領事ワトソン (Edward B. Watson) な

どが同席した。

ダリンが「両国民が一層友好的になれば、全世界がやがて一つの同胞体になろう」と歓迎の辞を述べたのを受けて、中西は「国会で張り合っている四党だが軍縮で減税となり国民の負担が減らすことや婦人に参政権を与えることでは意見が一致している」との自論を披瀝したと新聞¹⁾は報じている。

老齡の Morse 博士が「日本人は礼儀正しく倫理観が良かったのに、西欧人と付き合いようになってダメになってきている」と述べたという。

この昼食会に竹内孝一郎などの留学生が同席したが昼食後に議員団は MIT とハーバード大学を訪問した。

なおボストン日本協会は 1904 年に設立された。現在世界各地に日本協会が存在するが最初に設立されたのがボストン日本協会である。日露戦争後に締結されたポーツマス条約の交渉に当たった小村寿太郎がハーバード大学の卒業生であったことが設立のきっかけであった。創設時から秘書を務めたのが同席したシャーウッドである。

排日法が 1924 年に成立したが親日家のシャーウッドは日本の仏教徒の支援を得て 1925 年にボストンで雛祭りを行ったことが公文書に残っている。

(e) 母親代わりに石川のおばさん

茶話会への招待リストに O. Ishikawa という方がある。留学生の面倒を見た人だと想像がつくが苗字だけでは調べようも無かった。ところが上述した加藤が発行した雑誌 *The Japanese Student* の 1918 年 2 月号に K. Matsuno というハーバード大学の留学生が書いた “Our Mamma Ishikawa of Boston” と題した次のような記事を見つけた（以下は試訳である）。

石川さんはボストンの Boylston 通りで日本品を商っていたのだが年末に買物に行ってお櫃やお椀など昔懐かしい日本製品を見ていたら突然後ろから声をかけられて、「いらっしやいませ。大晦日に年越しソバとお雑煮を振舞うからお友達を連れてきなさい」と声を掛けられた。遠く離れた日本の母に出合ったような気がした。学校で出会った日本人に大晦日に石川さんのところに行くように誘ったのだが、当日行ってみると 45 人もの日本人が集って談笑していた。壁には見事な絵がたくさん掛けていた。

8 時に年越しソバが出た。食事が済むとボストン日本人学生会の会長の堀内弥次郎（日本で病院を経営）が開きを告げ、シカゴから来た加藤勝治を紹介した、加藤は 15 分ばかり話した。そのあと談笑したり、カルタ遊びなどをしているうちに年が明け、そしてお雑煮が賄われた。石川さんが一人で切盛りされた。遠い異国に居るのにまるでふるさとの母のもてなしのようだった。

上述したアンダーソン前大使宅庭園で園遊会を伝える日米週報の記事に石川栄子という名前がある、この人で間違いないだろう。さらに同紙の別の記事からご主人は日本ボストン界の中心的な役割をしていた石川春水だと分かった。春水は金沢工業学校（石川県）で久保

¹⁾ “JAPANESE SEEK PEACE IN PACIFIC”, BOSTON HERALD July 6, 1921

田米僊という当時話題の画家に師事し生涯趣味で絵を描き続けた、石川の店に絵が展示してあったと Matsuno が書いているのは春水の作品だろう。

竹内孝一郎がボストンに着任して間もない頃に石川夫妻と一緒に撮った写真が図 6.5 である。前列右端が竹内、中央が栄子、後列左端が春水である、その他の人々は不明。この写真の背後に額や画軸が見える、これらは春水の作品であろう。



図 6.5 石川宅でのスナップ写真(1919年)

ところでニューヨーク・タイムズの 1920 年 12 月 9 日号に石川商店の記事がある、石川の店で売っていた縫いぐるみの犬の人形の尻尾に星条旗が付いていたのが不敬罪だと住民に訴えられて 10 ドルの罰金刑を受けたという話である。当時西海岸では排日運動が激しかったが、東海岸でも過敏な人が居たようだ。これが直接の原因というわけではないだろうが、それから 2 年後に石川夫妻は欧州を漫遊したのち帰国した。ほどなくして関東大震災があって持ち帰った絵を含めて全資産を失った。漸く立ち直って絵筆に親しみ始めたが大正 15 年 8 月に他界した。急逝を悼んで栄子が『春水畫品』¹⁾という遺墨集を出版した、英和両語で書いた栄子の追悼文は達者であり教養が感じられる。なお『春水畫品』はハーバード大学燕京図書館の蔵書になっている。

(f) ボストン三田会と福沢八十吉

Y. Fukuzawa とローマ字で書いた署名が数箇所に出てくる、気になる苗字である。慶應義塾大学が出している『三田評論』に「1919 年 10 月 16 日にボストンの日本レストラン・大浦富士館で下記の 8 名で歓談した」との記事があり、福沢屋八十吉だと分かった。

齊藤甚一 竹内義成 阿部舜吾 岩崎清一郎 福沢八十吉

小熊信一郎 石田新吉 莊田孝平 渡邊茂蔵 森村勇

福沢諭吉の次男の捨次郎は MIT に留学したが、孫の八十吉はハーバード大学に学んだのだった。2 世代にわたってボストンで教育を受けたのが興味深い。なお八十吉はのちに慶応

¹⁾ 『春水畫品』、石川栄子（私家本）、大正 15 年

の社頭になった。

この中で阿部舜吾と岩崎清一郎以外の 8 名がボストン日本人学生会の記録に名前を書き残している。なお舜吾の兄の章蔵（作家名は水上瀧太郎）はこの会には出ていないが、ボストン日本人学生会の記録に出ている、念のためだが妹が小泉信三夫人である。

(g) テーラー (Taylor) 教授による飛行機講演会

大正 13 年 (西暦 1924) 8 月に海軍が MIT から航空工学のテーラー教授(Charles Fayette Taylor, 1894-1996)を招聘して講演会を行った。図 6.6 はその機会に日本 MIT 会が麻布の三井別邸で歓迎会を開いたときのものである。写真のカバーに「テーラー夫妻、三井 (高修) 男爵夫妻、團 (琢磨) 男爵夫妻、小林 (躋造) 海軍大将、山本 (五十六) 海軍少将」と書かれており、裏に列席者の名前がローマ字で書かれている、なお () に名前を追記した。

團琢磨は明治初期に MIT で学士号を取得しており、明治 44 年に日本 MIT 会を創設した¹⁾。ちなみに三井高修も MIT で学んでおり、後に日本 MIT 会の第 2 代会長になった。

この写真に写っているのは全員で 35 名であり、その内の 9 名が出席者の夫人である。このなかにボストン日本人学生会の記録に名前を残している人が山本五十六のほかに 15 名居る、なお山本はハーバード大学だが残りの 14 名は MIT で学んだ、その 14 名の中に日本 MIT 会の第 3 代会長となった亀谷勝がいる。このほかに三井を含めて MIT で学んだが『ボストン日本人学生会の記録』に出ていない数人が写真の中に居る。



図 6.6 Taylor 教授講演会記念写真 (三井別邸にて)

¹⁾ 『日本 MIT 会七十五年の歩み』藤崎博也編、日本 MIT 会、1986

列席者の中で MIT で航空工学を学んで学位（修士号）を取得したのは竹内孝一郎ただ一人であり、それは 1921 年のことであり論文のタイトルは次の通りだった。

Best type of airplane for minimum landing and getting away distances, supervised by Edward P. Warner

竹内に先立って橋本賢輔が MIT で航空工学を聴講しているが学位は取っていない。橋本は 8 年間もの長期にわたり幅広く飛行機の研究調査を行ったので竹内とミッションが違ったようだ、この橋本も写真に写っている。

ところで MIT が航空工学の過程を開設したのは 1914 年であり、これは全米で初めてのことであった、そして 1916 年に最初の修士号を授与している所以竹内は黎明期の研究生だったわけである。

なお昭和 6 年にテラー教授は日本海軍のコンサルタントとなっている、留学生の影の功績でもある。

(h) ボストン日本人界の状況

ニューヨークで発行された週刊誌『日米週報』が誌名を『日米時報』と変えた、日本で閲覧できるのはその一部だけである。ボストン関係では次のような記事が目につく。

- ・1918 年 6 月 8 日号：林並木、森兵吾両氏の送別会。去る 5 月 19 日、石川夫妻は両教授の為に送別会を催せり。出席する留学生諸氏三十余名。頗る盛大に午後十時半散会。
- ・1918 年 10 月 5 日号：故・川崎少佐葬儀。住民代表：石川春水。参列者：折戸牧師、喜田海軍主計官、三戸海軍大尉、都築大尉、鈴木賢輔、田辺工学士、得田軍医、工大の松本氏、山中、橋與市
- ・1918 年 10 月 26 日号：天長節祝賀会委員 総委員長：折戸忠作、遥拝式委員長：山中繁次郎、副委員長：石川春水 委員：堀内弥次郎、三戸由彦、平岡次郎、清水武雄
- ・1918 年 10 月 26 日号：ボストン日本人会設立案提議ありしが、それ天長節後に熟議することとせり。

石川春水が中心的な役目だったことが分かる。記事にボストン日本人会の設立とあるが既に活動していたので新規巻き直しかもしれない、しかしこれ以降の記事が無いため結末も不明である。

(i) 雑誌『英語青年』の「ボストン便り」

明治 31 年に創刊された雑誌『英語青年』の大正期の号にボストン日本人学生会のメンバーである高柳賢三（法学者）、野間真綱（英学者）、杉村一枝（英学者）がボストンの様子を紹介する記事を連載で書いている。またボストンに立ち寄った岡倉由太郎、伊地知純正、石川林四郎、市河三喜、日高只一が同誌に寄稿している、さらに太平洋航路上でボストン関係者に出会ったことを厨川白村が書き留めている。これらの記事に出てくる関係者を順不同

で以下に記す。

服部卯之吉（宗教学者、ハーバード大学客員教授）、寺尾博（農学者）、今岡信一良（宗教学）、西崎勝之（海軍技師）、野間真綱（英学者）、中西次郎（法学士）、林並木（英学者）、土方成美（経済学者）、渡邊敢（神学者）、中田浩（商学者）、山形元治（英学者）、綿貫哲雄（社会学者）、苫米地英俊（英学者）

文豪ホームズ（Oliver Wendell Holmes）の孫（Sybil）、ウッズ（James Haughton Woods、宗教学者）、スプラグ（Oliver Mitchell Wentworth Sprague、経済学者、東大教授）、ダーリング（John Lincoln Dearing、来日宣教師、教育者）、モース（Edward Sylvester Morse、生物学者、東大教授）、ベーカー（George Philip Baker、米国劇場界の長老）、ウェルチ（Herbert George Welch、宣教師、教育者）

『英語青年』という雑誌の性格ゆえに文系の人を中心であるが、一緒に文学者のゆかりの地であるロングフェロウの旧宅やコンコードの史跡を巡っている、その様子が偲ばれる。

これらの記事から関係者の経歴が分かる。たとえばボストン日本人学生会の記録に、山形元治は崩し字で署名しているのが読みにくいのだが、石川林四郎が「山形は東大英文科卒」と書いていることから読み解けて「第五高等学校教授」と分かった。

また文豪ホームズの孫やハーバード大学教授で米国劇場界の長老だったベーカーなどは『英語青年』のこれらの記事がなければ解明できなかった。

(j) 特命事項を担っていた小柳助治

ボストン日本人学生会の会合には日系人を含む学生、教員、現地邦人のほかに来訪者が出てくる。アメリカ各地で講演をした菊池大麓や新渡戸稲造、あるいはマラソン選手の山田敬蔵などが分かり易い例である。これらの著名人はジャーナリストが追いかけるので記録が残るが、一般の人の場合は学籍などの記録がないので追跡できないことが多い。それで日本ボストン会のホームページで情報の提供を求めているのだが、それを見たと言って小柳助治のご子息から連絡が届いた。やり取りを繰り返している内に遺稿をもとにした私家本が出来上がってきた。

この私家本によると小柳助治は海軍からの内密の使命を担って米国が進めていた電気推進方式の軍艦などの調査にあたったのだという。企業や大学の内部に伝を求めて入り込んで調べたのだった。表の記録には出てこない事情を知った。

『ボストン日本人学生会の記録』にペンネームらしい風変わった名前を書いている人が居るのだが、ひょっとするとこの種の特命事項を持っていた人かもしれない。

7 キリスト教徒学生会の期間(1924-1928 学年度)

1922 年度と 1923 年度の記事は無い、後者が無いのは関東大震災の影響であろう。

記録集の第 3 冊目は 1924 学年度から 1929 学年度までの間キリスト教徒の学生が Japanese Student Christian Association (略称 JSCA) として活動したことを記している。

この時期のボストン日本人会の活動は把握できていないが、このときから戦後にかけての長い期間にボストンの日本人界の中心人物として活躍した八橋春通を紹介する。

7.1 キリスト教徒学生会としての活動

1923 学年度は、Iwamoto と Yoshio Kamii(上井)をリーダーとして時々ハーバード大学のフィリップス・ブルックス・ハウス (Phillips Brooks House) に集ったが活動の記録を残していないので詳細は不明である。

1924 学年度になるとボストンに "The J.S.C.A. in North America" のメンバーである Yoshio Kamii が会長、 亀谷勝 (機械工学専攻) が副会長そして Francis Kiei Endo が幹事となり組織的な活動を行った。先ず第一回目の会合(10 月 12 日)で "The J.S.C.A. in North America" 会長の Roy Akagi(赤木英道、二世)が JSCA への入会を求めた、参加したのは MIT から亀谷勝と池原止戈夫 (数学で PHD) などの 5 名、ハーバード大学から藤原唯義 (冶金工学専攻) と藤代真次 (矯正歯科医) などの 11 名、ボストン大学から田頭千代吉 (神学専攻) などの 4 名、そのほかただ一人の女性 Moriguchi Fujie (留学先不明) と所属不明の Doi Yonezo であり、合計で赤木を含めて 23 名であった。

この後、連続して 3 回の講演会があった、先ず 11 月 2 日に朝鮮で布教していたウェルチ (Herbert George、この講演は後述)、11 月 30 日にマサチューセッツ州西部のウィリアム・カレッジの政治学部で講師をしていた鶴見裕輔 (哲学者・鶴見俊輔の父)、そして 12 月 7 日にハーバード大学医学部の野辺地慶三である。

1925 学年度は前年度と同じように月例会 (参加者は 20 名前後) を開き新年会も前年と同じ場所で開いたと書かれているが、その内容は書かれていない。会長は田頭千代吉 (聖職者) で、会計担当は遠藤(Francis Kiei、聖職者)だった。

1926 学年度の会長は福田敬太郎 (神戸高等商業教授)。説教は止めることにした。月例会で討議した話題は、ヨーロッパの印象 (滞欧 3 年の北村教授 (不詳))、貧困の定義、現代政治理論、人口問題などであった。

1927 学年度の会長は D. Ide (不詳)。例会の会場をマウント・バーノン教会からハーバード大学のフィリップス・ブルックス・ハウスに変えて、お祈りと説教は止めて茶話会だけにした。例会は 3 回開いた、参会者は 35 名以上だった。

1928 学年度の会長は MIT の南和夫 (二世、早稲田大学教授)。日曜日の午後に茶話会を 3 回開いた。参会者は 30 名から 35 名だった。

1929 年度から Japanese Student Christian Association を発展的に解消させて Greater

Boston Japanese Students Association として活動することになったことを伝え、この3年間は遠藤の功績が大きかったことを記して第三冊目の記事は終わっている。

7.2 主な出来事、主な人

(a) 朝鮮監督 (bishop) ウェルチ(Welch)

1924年11月2日の月例会でウェルチ(Welch) 監督(bishop)が日本統治下での朝鮮問題を論じた。ウェルチは活水学園と姉妹校であるオハイオ州にあるウェスリアン大学の学長を務めてから聖職者となり朝鮮で布教活躍をしていたので日本統治下の朝鮮の抗日運動に詳しくあった。参加者は日本人が20名、アメリカ人が3名、朝鮮人が男女4名であった。

Welch は長崎にある活水女学園の役員でもあったが、ボストン日本人学生会の第3代会長の鈴木謙吉が帰国後に勤務した学校である。鈴木の前職期間は、大正4年4月から3年半なので、この時点からだと10年前に撮影したものである。Welch はたいへん長命であり天に召されたのは満106歳のときであった。

(b) 空前絶後の盛会だった1925年の新年会

1925年元旦に山口夫人がホステスとなり、3名の男性(上井、亀谷、渡邊)が中心となりニューヨークに買出しに行くなどして準備をして新年会を開いた。この新年会の様子を伝える「一九二五年加州日字新聞の乗れるボストン日本人会記事」として新聞の切抜きが貼り付けてある(図7.2)。

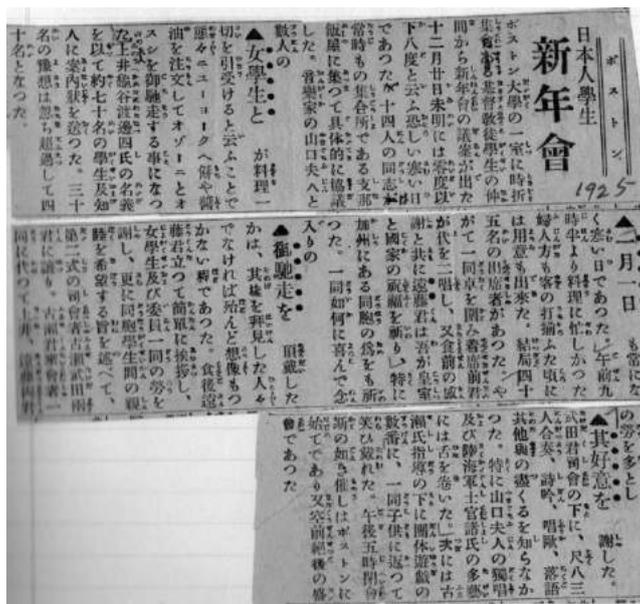


図 7.2 1925年のボストンの新年会の様子を伝える邦字新聞の記事

この記事によると参加者は45名であり、君が代の斉唱で始まり排日運動の激しいカリフォルニア在住の同胞のこと偲びつつ、御雑煮で新春を祝っている。尺八、詩吟、落語などの

余興を楽しんだ。空前絶後の盛会だったと伝えている。

この新年会の会場はチャールズ河沿いに当時あったマウント・バーノン教会 (Mount Vernon Church)である。

ところで山口夫人をローマ字で **Ko Yamaguchi** と書いている、箱根宮ノ下の富士屋ホテルの跡取り娘と同名であるが同一人物か否かについては意見が分かれている、新史料の出現を待つ。

(c) 春なお遠い日のピクニック

1926年4月にボストン郊外のリン (Lynn)にピクニックに行っており、そのときの写真(図7.3)がノートに貼り付けてある。参加者は書かれていない。ボストン地区の春の到来は遅いので皆は厚手のコートを着ており雑木林に春の息吹は感じられない。



図 7.3 1926年4月のピクニック

(d) 無冠のボストン日本領事と称された八橋春通

大正末期から戦後にかけてボストンの日本人界の中心人物だったのが八橋春通である。

『日米週報』(1926年9月18日号)に下記の記事がある。

八橋君はボストン山中商会の支配人であるが世人は称して無冠のボストン日本領事と云ふ。その理由は同市における同胞の出来事が細大なく氏を煩はし同氏に依って処理されるからである。実際氏は米人に対してボストンの同胞を代表する代表的人物である。

八橋春通は高知県の出身で、明治38年に山中商会に入社し、明治40年(西暦1908)からボストン支店の経営にあたった。当時のボストンには現在のように総領事館がなかったが日系人・日本人の世話をし、またボストン日米協会の理事となるなど日米親善に努めたので無冠のボストン日本領事と言われたというわけである。

太平洋戦争が始まって山中商会は1943年に閉店したが、翌年戦時下では日系人初となる営業許可を得て H.八橋商会を設立して営業を再開した。このようにアメリカの東海岸の日本人は西海岸のように拘束されなかったので戦時中も活動を続けることができた。八橋春通は戦後も活動を継続してボストン日本人界の中心人物であり続けた。

8 戦前の最後の期間(1930-1933 学年度)

8.1 会合の記録

会合の記録が次のように 6 回分ある。

- 1929 年 11 月 12 日

第四冊目の冒頭に 1929 年 11 月 12 日に 27 名が参加した会合があったが、これがハーバード大学と MIT の合同会合の最初だとし、参加者が自ら書いた名簿が出ている。会場は Mai Hong Low という中華レストランであった。

- 1931 年 6 月 2 日

南和夫が MIT を卒業するのを祝って 10 名が参加した、全員が MIT の留学生である。

- 「1932-1933」と学年度を示めたページ

日付は無いが MIT 留学生 6 名が自署している。そして最下段に 1932 年度はケンブリッジ (Cambridge) の金曜クラブ (Friday Club、不詳) との会合を頻繁に行ったのでボストン日本人学生会の例会は招集しなかった、との池原止戈夫 (当時の会長) が書いている。

- 1933 年 10 月 21 日

出席した 34 人全員が住所を書いている。会合の目的は書かれていない。

- 1933 年 12 月 15 日

第二回座談会「村松氏の精神病の話を聴く会」と書かれており 13 名が参加している。講師は当時ボストンの病院 (Boston Psychopathic Hospital & Mass General Hospital) で研修中の東大講師・村松常雄であった。

上記の 10 月 21 日が第一回座談会だったのかもしれないが、その旨の記述は無い。

- 1934 年 1 月 5 日

新年会だと書かれており 20 名が参加している。これが戦前の最後の記録である。なお禁酒法が 1933 年 12 月に廃案になったので、晴れてお屠蘇で新年を祝ったことだろう。

8.2 主な出来事、主な人

(a) 留学生に溜まり場を提供した藤代眞治

藤代真次は千葉県出身である、大正半ばにハーバード大学医学部で矯正歯科を学び同校の講師になった。そして現地で矯正歯科医院を開業したが、自らが苦学生だったこともあって留学生の世話をよくみたので藤代宅は留学生のたまり場となった。開戦となり藤代夫人と二人の子供 (素子、賢一) は第一次日米交換船で、身柄を拘束された眞治は後れて第二次交換船で帰国した。世話になった人々が眞治の日本での活動を支援したことが報ぜられ

ている¹⁾が、戦後間もなく亡くなった。

なおアメリカで麻酔を最初に治療に用いたのがハーバード大学の歯科医であったこともあり、日本からハーバード大学の歯科に留学する学生が続いたことが記録集で読み取れる。

(b) 大正期から戦後まで活躍した池原止戈夫

池原止戈夫は兵庫県の出身であり、1924年にMITに留学して電気工学を学んだ。大学院で数学者ウィーナー (Norbert Wiener, 1894-1964)に師事してPhDを取得し、講師になった。1932学年度にボストン日本人学生会の会長だったのが記録で分かるが、その前後も会長だったかもしれない。1934年に帰国するまで長期間ボストンで活躍したので記録集の随所に名前が出ている。戦後も一時期MITで教えたことがある。ウィーナーのサイバネティックスの著書を訳しており、情報処理の先駆者の一人である。

(c) ハーバード大学の黄金時代を築いた都留重人

都留重人は記録集に出身地を大分県と書いている。名古屋の第八高校生だったがある事情で勉強が続けられなくなって1931年にアメリカに渡り、ハーバード大学に入学したのは1933年だった。学生に逸材がそろっていてハーバード大学の黄金時代と言われた時期に優等で卒業した。

当時ハーバード大学で東大の岸本英夫が日本語を教えに来ていたが、日本人の学生はほかには居なかったという。道理でこの時期のボストン日本人学生会はMITの留学生が推進役だったわけである。岸本に教えられて日本人会の会合を知ったそうで、在留邦人の西宮母子 (ハナとチトセ) と八橋一家のほか、留学生だった栗野頼之祐 (ギリシャ史家)、大澤寿人 (作曲家)、池原止戈夫、下山重丸 (造園学者)、平野千恵子との交流を書き残している。また鶴見俊輔も日本人の会合によく顔を出していたと書いているので、行方不明になっている五冊目の記録集の出現を待ちたい。

なお岸本英夫の実父の能武太はハーバード大学に学んだ宗教学者であり、夫人の三世は大正期にハーバード大学の客員教授だった姉崎正治の長女である。

(d) この時期に取り分け目につく日系人

この時期にローマ字で名前を書いている日系人が目につく。日系人の消息は掴みにくいが、情報の得られた主な人々について生年順に記す。

・ Ernest Kenichi Moriwake 森分 謙一 (1902-)

ハワイの一世の教育熱心な人たちは育英資金の基金を用意した、それが伏見宮記念奨学金に発展したが森分はその基金を得てハーバード大学に学んだ一人である。

・ Oliver K. Noji(1904-1989)

NojiはMITで建築を学んだ。学内のポスターのコンペで入選したことが構内誌に出てい

1) 『朝日新聞』、「歯科戦列に復帰」、昭和19年2月14日

る。戦時中に強制収容所(Tule Lake Relocation Center)でキョ アイウラと結婚した。収容所で水彩画の展示会をやっているのは無聊を慰めるためだったのだろう。

・ Masaji Marumoto 丸本正二(1906-1995)

丸本はホノルル・マッキンレー・ハイスクールを優等で卒業し伏見宮記念奨学会から抜擢されてハーバード大学に留学した。戦後、日系人として初めて米国大審院の判事に就任した。

・ John K. Minami 南和夫(1907-1984)

南はワシントン州生まれの日系二世である。MITで4年間建築学を学んだ。在学中はMITの構内誌(The TECH)の運営に尽力した。耐震構造の先駆的な研究者だったが、ちょうど大恐慌の時期であり、さらに排日運動もあって就職難だったために日本に帰化し早稲田大学に奉職して活躍した。

・ Shizue Komu(1908-2007、結婚後は Shizue Komu Kuramoto)と Ethel Hideko Omori(1908-1993)

二人はタフツ大学医学部の同級生である。ボストンでの現住所が同じなのでルームメイトだったのだろう。二人はハワイの出身で1935年に卒業して国許に戻った。

・ Robert Masayuki Hisamoto 久本正行(1908-2007)

1932年3月に英国、スコットランドとベルギーとで無線通信を実験するプロジェクトに参加したことがMITの構内誌に出ている。これを記念して自分の愛称をRadioとしていた時期がある。久本は戦後の学生会の会合にも出席している。

・ 経歴が不詳だが次の日系人が署名を残している。

Kazuko Higuchi (1904-1979, ハワイ出身) 留学先不明

George Nakashima (1905-1990, シアトル出身) MIT 留学

Frank Masae Ikuno (1909-1967, カリフォルニア出身) MIT 留学

Semkichi Hamazaki (1909-1981, ハワイ出身) MIT 留学

Utako Yamada (1913-1990, ハワイ出身) 留学先不明

日系人学生はどの時期にも少なからず居るが、この時期に目立つのは西海岸の排日運動の激しさの影響であろう。

(e) 高松宮殿下のボストン訪問

1931年4月に高松宮殿下、同妃殿下がボストンを訪問された。新婚旅行で欧州経由での来訪であった。ボストンは全市を挙げての歓迎となった、そしてボストン市長カーリー氏主催の晩餐会(4月26日)で氏の歓迎の辞に対して殿下が「新しき日本が生れた時、特にボストン地方の多数教育家、宗教家等が新興文明の開発に寄与せる事多大ありし事について感謝する」旨の演説で応ぜられたと当時の日本の新聞は報じている¹⁾。フェノロサやマッコ

¹⁾ 讀賣新聞 昭和六年四月二十七日 夕刊

レイなど来日した学者、宣教師が先ず頭に浮かぶ、そうして新島襄、團琢磨などボストン地区で学んだ人々と異郷に飛び込んだ留学生を迎え入れた人々に思いが移る。

ボストン地区の日本人が歓迎会を開いた。写真(図 8.1)¹⁾はそのときのものだが、留学生だった大澤壽人の旧蔵品である。大澤壽人は最右端の女性(八橋春通の娘・菊江)の直前に座っている。

メインテーブルの最右端は在留邦人の八橋春通である、この時点では山中商店ボストン支店長だった。その前のテーブルに夫人(茂喜)と子供たち(菊江のほかには正夫とスミコ)と弟の捷五郎が居て、さらに Oliver K. Noji が居る。その左奥のテーブルはハーバード大学の席で、藤代眞治、下山重丸が確認できる。さらに左奥のテーブルは MIT の席であり池原止戈夫、南和夫等が見える。一番奥に立っている人のなかに、真鍋満太(歯科医)・静子夫妻、山田治夫(大澤のルームメイト)や Semkichi Hamazaki が居る。

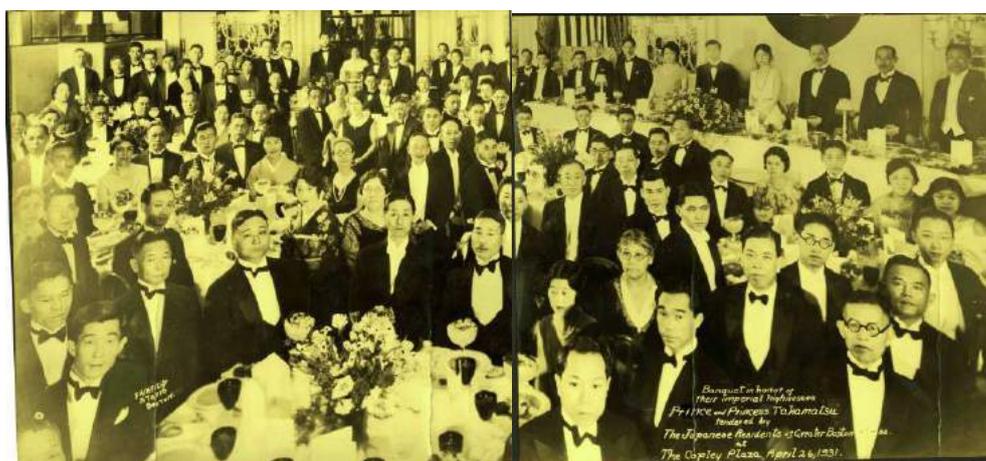


図 8.1 高松宮、同妃殿下歓迎(1931年4月26日)

左手前の席にコネチカット州で日本料理店を経営していた野島淳三²⁾が確認できる、後述するが野島の弟の豊志が戦後ハーバード大学に留学している。その次のテーブルに富田幸次郎(ボストン美術館東洋部)夫妻と中村画伯(Kanji、ボストン美術館に作品あり)が居る、二人は記録集に出てこないが、中村夫人(イタリア人)のお国料理を大澤壽人とともにしばしばご相伴に預かったと山田治夫が書き残している²⁾。

ところで当時のアメリカは禁酒法のため飲酒は違法であった。テーブルに立派なグラスが並んでいるが、中はソフト・ドリンクだったわけである。

なお晩餐会の前日の25日に両殿下はハーバード大学で訪問し、図書館と美術館を見学したのちローウェル(Lowell)学長招待の昼食会に臨まれた。夕方は美術収集家で著名なガードナー(Gardner)夫人宅にてハーバード大学の合掌クラブ(Harvard Glee Club)の演奏を

1) 神戸女学院所蔵資料「大澤壽人遺作コレクション」

2) 『米国日系人百年史 在米日系人発展人士録』新日米新聞社、1961

2) 「白寿祈念(上)」山田治夫、2003

楽しまれた。このことを構内誌クリムソンが大きく取り上げている。

27日にはMITを訪問された、先ず海洋工学科で多数の留学生在が学んだことを回想し、ついで機械工学科では動画でバイオ技術の説明を受けられた。電気工学科では開発されたばかりのストロボスコープを見学した後、留学生の十合晋次（東京工業大学教員）が研究している人工オーロラをご覧になられた。

日本からの留学生6名が出迎えたとMITの構内誌が書いている、十合のほか本宿哲郎（海軍）、藤井敬三郎（住友）、山田治夫（台湾台南高工教員）、池原止戈夫が記録集で確認できる、そして日本MIT会の名簿から6人目は川添惣一と考えられる。このほかに客員教授だった平山嵩（当時東大助教授、建築学）と在学していた南和夫などの日系アメリカ人がMIT日本人会メンバーとして歓迎の席に臨んだことだろう。

(f) ニューウェル (Newell) 教授による飛行機講演会

昭和8年（西暦1933）に海軍がMITから航空工学のニューウェル教授（Joseph Shipley Newell, 1897-1952）を招聘して講演会を行った。上述したテーラー教授の来日講演と同じように日本MIT会が麻布の三井別邸で歓迎会を開いた、そのときの写真が図8.2である。



図 8.2 ニューウェル教授講演会記念写真（三井別邸に

写真の裏に T. Mitsui の招待である旨の書き込みがあり、写っている人々の苗字がローマ字で書いてある。MIT で学んだ三井高修男爵が当時日本 MIT 会の会長であった。

この写真には44名が写っている、Taylor のときには9名の夫人を除いて26名だったので、18名も多くなったのはその後MITで学んだ留学生が増えたためである。海軍の制服組のほかに平服が目立つのは日本MIT会の歓迎会なので民間人が多数参加したからである。

テラーとニューウェルの両方の写真に写っている日本人は次の 12 名である（留学年度順、() 内は MIT での専攻）、山本五十六を除いて全員 MIT で学んだ人々である。

鶴田勝三（機械工学）、後藤兼三（海洋工学）、和田猪三郎（化学）、
平岡通也（鉱山学）、川崎丈雄（電気通信）、三戸由彦（海洋工学）、
三井高修（化学）、黒川兼之助（電気工学）、杉村伊兵衛（機械工学）、山本五十六（ハーバード大学）、竹内孝一郎（航空工学）、亀谷勝（繊維工学）

この中で MIT で航空工学を学んだのは竹内孝一郎だけである。

なおアメリカ人で両方の講演会に出席した人が居る、それは日本 MIT 会の事務局役になっていたスチーブンス（Henry Warren Stevens）である。氏は MIT で電気工学を専攻し 1904 年に学部を卒業しており、トラスコン（Truscon Lab.）社の日本法人に勤務していた。

(g) MIT で航空工学を学んだ人々

上述したように MIT の教授を招聘して講演会が 2 度行われたが、ともに飛行機（航空工学）についての話であった。そこで太平洋戦争の開戦までに MIT で航空工学を学んだ人々を調べた。

『ボストン日本人学生会の記録』に出ている軍関係者で航空工学を学んだのは橋本賢輔、竹内孝一郎、杉本修、本宿哲郎、塚田英夫、原豊と高橋一郎の 7 名であり、民間人では神蔵信雄、上條勉と亀岡泰家の 3 名である。このほかに『ボストン日本人学生会の記録』に出ないが、日本 MIT 会の名簿¹⁾に出ていて航空工学を学んだのは有坂亮平、大築志夫、御酒本芳男、宮澤基厚および神谷茂の 5 名である。以上の合計で 15 名であるが、このうちの 10 名が 1932 年から 1935 年までの 5 年間に入学している。

これら 15 名の中で修士号を取得したのは、竹内孝一郎、上條勉、塚田英夫と大築志夫の 4 名であり、学士号を取得したのは高橋一郎のみである。このなかで民間人は上條勉だけである。

ところで高橋はボクシングでも活躍していて構内誌 The TECH に 2 回登場している。勉学で多忙の中でスポーツでの活動は特筆すべきである。

(h) 民間人ではただ一人航空工学を学んだ上條勉²⁾

上條勉は明治 38 年に生まれたが両親が夭折したために従兄の同志社大学教授・水崎基一の支援を受けて同志社中学で学んだ、しかし水崎が学園紛争で追われたので横浜高等工業学校（現在の横浜国立大学）に転じて大正 15 年に卒業し同校の教員となった。同校の教授に MIT で学んだ遠藤政直が居た。

昭和 4 年にイリノイ大学に私費留学し機械工学を学んだ後、ミシガン大学に移り昭和 6 年に航空工学科を卒業した。ついでニューヨーク大学で航空工学の修士号を取得し、昭和 8

1) 『日本 MIT 会七十五年の歩み』藤崎博也編、1986、日本 MIT 会

2) 『大空への道』上條勉、1984、評論社

年2月にMITに入学し昭和9年6月に航空工学の修士号を取得した。

上條勉はMIT大学院で上述したテラー教授に航空エンジン、ニューウェル教授に理論機体構造学を学んだ。さらにスミス (Smith)教授に理論空気力学、コッペン (Otto C. Koppen) 教授に機体計器を教わった。

上條は塚田英夫と大学院でともに学んだと書いているが、学部で学んでいた日本人留学生 (原豊と亀岡泰家) のことに言及していないのは授業が別だったからであろう。

上條の修士論文の課題は、飛行船 macon の風洞模型を使って境界層(boundary layer) の厚さを測り重量 (virtual mass) を算出することだった。受理された修士論文の論題は下記の通りである。

Determination of the virtual mass of macon due to viscous drag within the boundary layer

上條は当初はMITの寮に入っていたがほどなくしてボストン市内のアパートに移った、ルームメイトはボストン大学で学んでいた川西誠晃だった。川西を介して親しくなったボストン大学留学生の向坊長英 (青山学院教授)、大村勇 (牧師)、名取順一 (早稲田大学教授) などとの交流を書き残している。またボストン日本人学生会の3回の会合に名前を書き残している。

上條はMITを卒業して帰国し三菱重工に入社してニューヨーク勤務となった。しかし開戦となり第一次交換船で帰国した。船上で外務省の幹部 (野村大使、井口参事官) の求めに応じてアメリカの航空機産業の状況を数日にわたって説明した。

(i) 国際的造園家・下山重丸

世界で最古のガーデニングの本として知られている『作庭記』は平安時代に書かれた。原著者は橘俊綱(1028-1094)と考えられている。寝殿造の庭園に関する書であるが原本は存在せず写本が伝わっている。この本を造園家の下山重丸が英訳し、書名を **Sakuteiki** とし副題を *The Book of Garden* として1976年に東京で出版した²⁾。下山は1931年4月の高松宮、同妃殿下歓迎(図8.3)や昭和9年の新年会の出席者名簿(図8.1)に登場するようにボストンで長期間活躍した。

インターネットの古本サイトで見つけたのだが、古本屋は「著者が献本したときにメモを書き入れている」と註をつけて売っていたが気にすることも無かろうと思って購入した。届いた本の扉に図8.3に示すような書き込みがあった。

For Dr. Shigeto Tsuru, S. Shimoyama with compliments

このことから、この本は下山が都留重人に贈呈したものであることが分かった。

さらに「作庭記 きく耳もたむ 石語る」という下山自作の俳句が書いてあり、これを英訳した **Have an ear to hear! For, in Sakuteiki, the stone speaks aloud.**が書き添えてあった。

一般的には書き込みがあると古書としては好ましくないようだが、著名人が登場すると

²⁾ *Sakuteiki* translated by Shigemaru Shimoyama, 1976

事情は違ってくることだろう。それにしてもこの古書が手に入ったのは幸運であった。

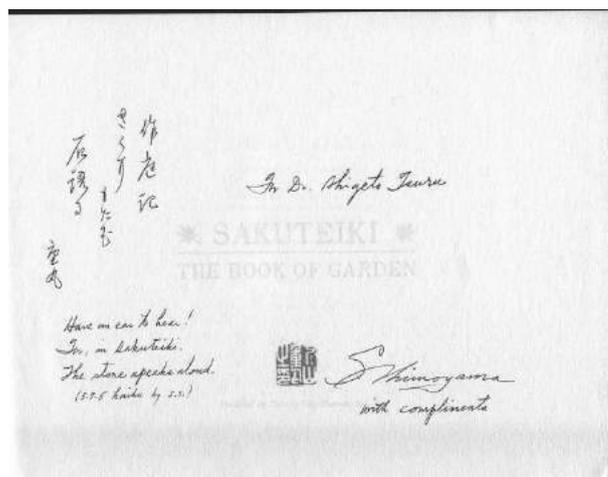


図 8.3 “Sakuteiki” の扉の書き込み

本文の序文に「作庭記は世界で最初の造園の本だ」と書いてあり、下山が古希を過ぎてから、英訳して世界に広めようとした。奥付によると 300 部だけの限定出版だった、そしてこの本には No. 75 という番号がスタンプ印で付されていた。

さらにライシャワー博士から下山に宛てた手紙のコピーが本に挟んであった。それには、「この本を受け取って感謝する、ハーバード大学の図書館に寄贈して日本を研究している人に読んでもらう。」とあり、さらに他の大学や日本の関係機関に贈呈するようとして候補先が挙げてあった。下山がこの指示に従ったことが、それぞれのところの蔵書になっていることから分かった。

下山は、この本の巻末に自らの経歴を次のように書いている：

Born in Japan, May 1900
Graduate, Univ. of S. Calif. (B. S. in Arch. 1927)
Graduate, Harvard School of Landscape Arch. (MLA-CP 1930)
Instructor, Harvard-Yenching Institute (1936-1937)
Investing Staff, Tokyo National Museum (1948)
Landscape Architect for U. S. Forces in Japan (1950-69)
City Planning Association of Japan (1970 to date)
(Free-lance Lecturer on the Japanese Garden)

下村はハーバード大学で講師のときには日本語と日本文化を担当した¹⁾。戦後は世界各地で日本の造園について講演を行って日本文化の紹介に務めた。

(j) 作曲家・大澤壽人¹⁾

¹⁾ 「下山重丸氏に聞く」造園雑誌 No.3, Vol. 49, 1986

¹⁾ 『大澤壽人交響作品 関西・東京連続演奏会』オーケストラ・ニッポニカ、2006年3月

上述したように高松宮殿下歓迎会の写真は臨席した大澤壽人のご子息から頂戴した。大澤壽人は関西学院を卒業して 1930 年にボストン大学に留学して音楽を専攻した。1932 年に日本人として初めてボストン交響楽団を指揮し、自作の「小交響曲」を演奏した。翌年学士号を取得した、1934 年夏にフランスに渡り作曲活動を深めた。1936 年に帰国したが、時代を先取りした音楽活動に時代はあまりにも悪すぎた。終戦間もなく夭折したために長らく忘れられていたが、最近再評価されて演奏会で作品が取り上げられるようになった²⁾。ボストン大学には下記のように大澤の署名と顔写真が付された「第 2 交響曲」の楽譜が保管されている。

A portrait photograph of the composer pasted on fly-leaf is inscribed "To my dear Dean Marshall [i.e. John P. Marshall] and to all my friends in the College of Music..." signed by the composer and dated May 1936.

ボストン地区で音楽で活躍する日本人の足場を築いた一人である。

(k) 戦前のスナップ写真

藤代眞治の長女の素子（現在 Motoko Fujishiro Huthwaite）と連絡が取れた。現在デトロイト郊外に住んでいるが戦前の興味深い写真を頂戴した。ボストン日本人学生会の活動を含めて当時のボストンの日本人界の一面を伝える貴重な写真である。

図 8.4 は撮影時期が 1932 年頃と考えられる写真である。座っている左から 2 人目は大澤壽人（作曲家）、その右が藤代綏子（眞治夫人、素子の母）。右から 2 人目は岸本英夫（当時ハーバード大学講師）。

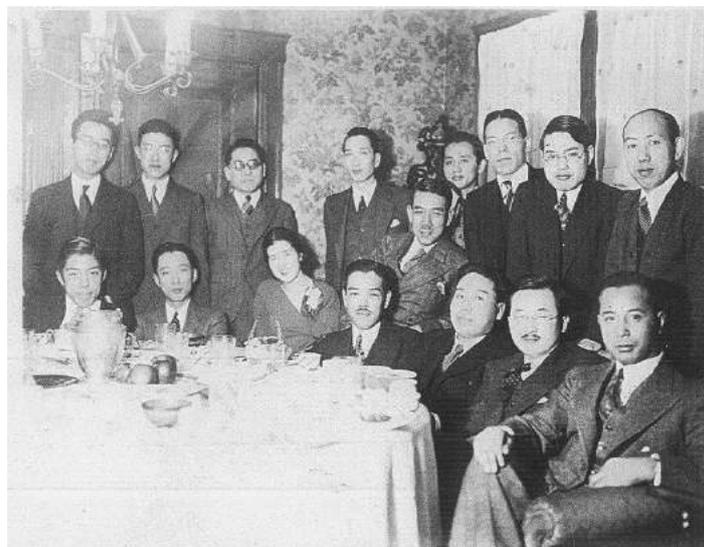


図 8.4 1932 年頃のスナップ写真。立っている右端が藤代眞治（矯正歯科医）、その左が池原止戈夫（当時 MIT 講師）。禁酒法の時代なので酔った雰囲気の人はいない。

²⁾ Piano Concerto No. 3 “Kamikaze”, Symphony No. 3 “Symphony of the Founding of Japan”, Hisato Ohzawa

9 記録の空白期間(1934-1947)

鶴見俊輔がボストン日本人学生会の書記役だった時期のノートが行方不明のために 1934 学年度から太平洋戦争をはさんで 1947 学年度までの記録が無い。しかし幸いなことに上述した藤代素子さんからいただいた写真がある。そしてゲームの成績らしきことを記したメモがある。これらが当時の様子を伝えてくれる。

(a) ゲームの成績らしいメモ

何かのゲームの結果を書いた下記のメモが残っている、図 9.1 と図 9.2 である。

図 9.1 には原、川口、古畑、西宮、栗野、藤代、林、都留と本城が出ている。本城（後の東郷文彦、外交官）は鶴見俊輔が書記だったときのボストン日本人学生会の会長だったので、このメモが 1940 年頃のものだと推測できる。

Game No.	本城	都留	林	藤代	栗野	西宮	古畑	川口	原
No. 3	6.5	2.7	9.2						
No. 1	5		5						
No. 47	4.5	2.5	7.0						
No. 15	4	2.5	6.5						
No. 46	3.7	1.7	5.4						
No. 2	2.5	1.0	4.5						
No. 20			3.5						
No. 18	3.7	1.5	4.2						
No. 9	2		2						
No. 8		1	3						
No. 27			2						
No. 34			5						
No. 14									

Additional handwritten notes and calculations at the bottom of the page include:

- 38
- 原
- 川口
- 古畑
- 西宮
- 栗野
- 藤代
- 林
- 都留
- 本城
- 2
- 2
- 19.65
- 4.25
- 19.2
- 2.2
- 19.02
- 0.6
- 5.0
- 3.6
- 2.6

図 9.1 ゲームのメモ その 1

当時ボストン地区に居た人から原寛（植物学者）、川口弘（経済学者）、古畑正秋（天文学者）、栗野頼之祐（ボストン美術館東洋部長）、都留重人（経済学者）と考えられる。

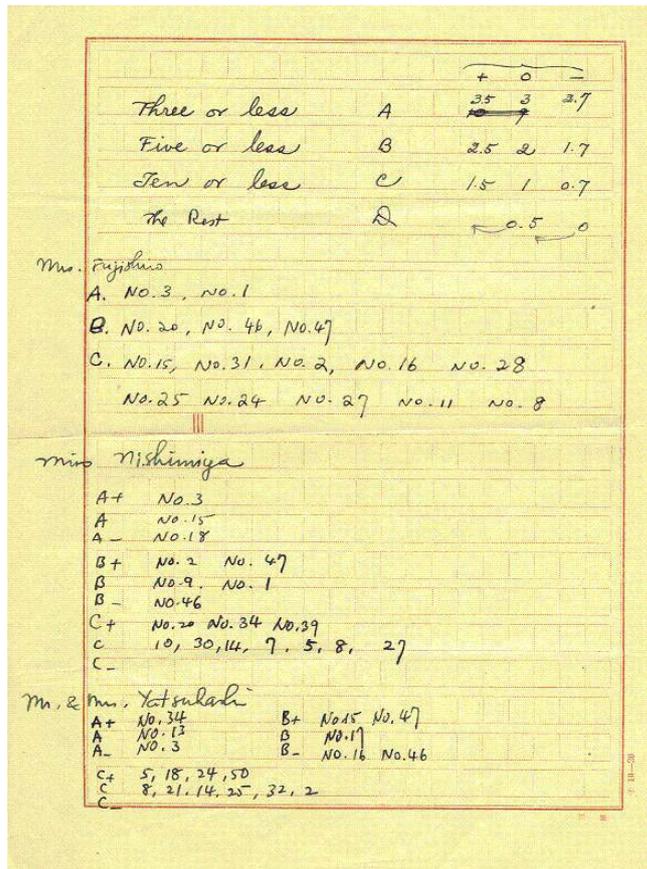


図 9.2 ゲームのメモ その2

図 9.2 には Mrs. Fujishiro, Miss Nishimiya, Mr. & Mrs. Yatsushashi が出ており、ローマ字を漢字に直すと藤代綾子、西宮チトセと八橋春通、茂喜夫妻となる。それゆえ図 9.1 の藤代は綾子、西宮はチトセとみてよい。残る林だけは候補が絞りきれない。

(b) スナップ写真

(b-1) 1936 年頃の写真

図 9.3 の写真には日本学を立ち上げた Sergei Elisseeff と Edwin O. Reischauer などが写っているので撮影時期が 1936 年と考えられる。

前から 2 列目の大柄な男性がエリセフ (Sergei Elisseeff) ハーバード大学教授である。いわゆる赤ゲットであるが、日本語が堪能だったので東京帝国大学国文科で学んだ最初の外国人である。エリセフはハーバード大学で日本学を立ち上げた、その教え子が最後列の右端に顔が見えるライシャワー (Edwin O. Reischauer) である。ライシャワーの直ぐ前は藤代眞治 (矯正歯科医) である。

最前列左端は岸本英夫 (ハーバード大学で日本語の講師) で、右端は池原止戈夫 (数学者)

である。



図 9.3 1936 年頃の写真

前から二列目でエリセフの向かって左側が藤代綏子（眞治夫人）、その左はタフツ大学で医学を学んでいた Shizue Komu と Hideko Omori（ともにハワイ出身の二世）である。

前から三列目の右端は在留邦人の八橋スミコ（長女）・茂喜（母）・菊江（次女）であり、茂喜と菊江の間の後方が八橋春通（父）である。そして最左端に立っているのが下山重丸（造園家）である。

(b-2) 昭和 14 年 9 月 25 日撮影の写真

撮影日が裏面に書かれている写真が 1 枚だけある、日付けが昭和 14 年 9 月 25 日であり写っている藤代賢一（かたかず）の満 9 歳の誕生日であった。裏面に写っている人の姓が漢字で書いてある。



図 9.4 昭和 14 年 9 月 25 日撮影の写真

後列は左から、*野地 (Yohei, 歯科医)、*佐々木、*マスグレーブ、*山城 (譲治)、*今井、一名不明、*日高、原寛 (植物学者)、藤代眞治 (素子の父) である。

中央列は左から、*都留正子 (重人夫人)、藤代素子、*藤代賢一 (素子の弟)、May Onishi (二世)、*原夫人、藤代綏子 (素子の母) である。

前列は左から、*飯野、本城文彦 (外務省)、川口弘 (経済学者)、古畑正秋 (天文学者)、都留重人 (経済学者) である。

ここで*をつけた人々は『ボストン日本人学生会の記録』に出ていない。この時点でハーバード大学への留学生は鶴見俊輔だけであり、日本 MIT 会の名簿にも該当者が居ないので、野地、佐々木、山城、今井、日高と飯野は在留邦人、二世かもしれない。

(b-3) 昭和 15 年の新年会と考えられる写真

図 9.5 は昭和 15 年の新年会と考えられる写真である。壁に図 9.4 と同じ帆船の絵が掛っているのが藤代眞治宅である。

前列右端が Nobukazu Fukuhara、川口弘 (経済学者)、藤代賢一と素子、その後方に座っている男女は不明



図 9.5 昭和 15 年の新年会と考えられる写真

中央右端は不明で、その隣が平野千恵子 (ボストン美術館)、Sawada、藤代綏子、原夫人、一人置いて古畑正秋である。

最後列左から、藤代眞治、山城譲治、Yukio Furuhara、一人置いて都留重人、原寛 (植物学者)、左端は不明である。

氏名は藤代素子の記憶によっている。

(b-4) 昭和 15 年の夏と見なせる写真

図 9.6 の写真に写っているのは、右から George Isame Fujimoto (二世)、藤代眞治、西堀正弘 (外務省)、藤代綏子、賢一、本城文彦 (東郷文彦、外務省)、不詳の一人 (女性) をおいて素子である。



図 9.6 昭和 15 年の夏頃の写真

この時点でこのほかにハーバード大学講師の都留重人と学生の鶴見俊輔が居たが、MIT に日本からの留学生は居なかった。

(c) 開戦直後

太平洋戦争は真珠湾攻撃で始まったが、それはアメリカ時間で 1941 年 12 月 7 日だった。翌日のハーバード大学の構内誌クリムソンは“**Japanese Students Give Impressions Of Startling Action of Fatherland**”と題して在学中の日本人と日系人とのインタビュー記事を載せている。

23 歳の西堀正弘は「戦争になるとは思いもしなかった、一番驚いたのは来栖駐米大使だろう。日本人は平和を望んでいる。軍がやってしまったのだ。」と言い、鶴見俊輔は「日本人は侵略的になっていると思っていた。人々のことは心配だが、自分は世事に興味は無く今まで通りで変わらない。」と語っている。二人とも身柄が拘留されることを懸念しているとも述べている。

日系アメリカ人の George Fujimoto は「どうなるのか良く分からないが、他のアメリカ人と同じように戦争に関わっていく」と述べている。

同紙は 65 年後の 2006 年 12 月 8 日号で George Fujimoto にインタビューした。当てが外れて 3 ヶ月後には強制収容所に入れられたこと、シアトルに店を持っていた父親は馬小屋に 1 年間住まわされてから収容所に回されたこと、日本語教育が行われていて排日感情がひどくなかったミシガンの大学に行ったこと、そこでの成績は全部 A だったがそれ以外は C だったので埋め合わせしかなかったことなどを語っている。アメリカ政府が強制収容所が違法だったことを認めたのは戦後ずいぶん経ってからだった。

(d) 日米交換船で帰国した人々

太平洋戦争が始まってから半年経った 1942 年 6 月に日米両国は相手国に暮す母国人を同じ人数だけ母国へ送り返すことにして船を用意した。これが日米交換船¹⁾である。この船に『ボストン日本人学生会の記録』に出てくる次の人々が乗っていた。

加藤勝治

上條勉

都留重人

藤代綏子、素子、賢一

八橋捷五郎

本城文彦

都留重人の船中記²⁾が知られている。上條勉は遺稿集³⁾に乗船前から帰国までの状況を書き残している、なお上條は就職して勤務地のニューヨークからの帰国であった。

なお『ボストン日本人学生会の記録』を日本ボストン会で調査することを企画した井口武夫は日米交換船に乗っていた⁴⁾⁵⁾。同船していた寺崎マリコや藤代母子をよく覚えているとのことである。

1) 『日米交換船』鶴見俊輔、加藤典洋、黒川創、新潮社、2006

2) 『いくつもの岐路を回顧して 都留重人自伝』都留重人、岩波書店、2001

3) 『大空への道』上條勉、1984、評論社

4) 『開戦神話—対米通告はなぜ遅れたのか』井口武夫、中央公論新社、2008

5) “Demystifying Pearl Harbor: A New Perspective from Japan”, Takao Iguchi, translated by David Noble, I-House Press, 2010

10 戦後の活動(1948-1954)

10.1 活動状況

太平洋戦争が終わって 3 年後の 1948 年にアメリカへの留学が認められボストン地区にも留学生がやってくるようになった。1949 年にハーバード大学に留学した野島豊志が戦前の記録集を引き継いだことを上述したが、野島が戦前の記録を知る前から戦後のボストン日本人学生会が始まっていた。そして留学生が増えるにつれて組織だった活動に発展して行った。

(a) 自然発生的だった組織化前の活動

1949 学年度に留学した野島豊志（ハーバード大学留学生、弁護士）は 11 月 10 日に日本人 8 名とハワイの日系人学生 4 人が集って懇談したのが戦後最初の集会だったと書いている。

しかし「10 月 8 日金曜日に **Japanese Students Association in Greater Boston** が歓迎会を行う」という鮎川弥一（MIT 留学生、帰国後はベンチャー・キャピタリスト）名の英文の案内状が残っている、10 月 8 日が金曜日なのは前年の 1948 年だから、こちらの方が時期的に早い。いずれにしろ自然発生的に戦後の日本人学生の集りが始まっていた。

(b) 組織的な活動

(b-1) 1950 学年度

1950 年 10 月に日本人留学生会を結成し幹事を決めたが会則は作らないことにしたと野島が書き残している。

そして 11 月 11 日に全マサチューセッツ州日本人留学生が約 30 名集って総会を行った。総会後の会食に一世と二世を招待した、参会者は合計で 104 名だった。追分、民謡、手品、ピアノなど芸達者が腕を競って盛会だった。

この後は以下に記すように学年度末の 1951 年 5 月まで毎月第一土曜日に集会を行った。毎回 20 人程度の同じ顔ぶれだった。

- ・ 12 月 2 日：山本達郎東大教授(ハーバード大学に勉強中)が東洋史について講話
- ・ 1 月 6 日：モニカ レアレイ夫人のピアノ伴奏で萩谷納（音楽家、桐朋大学教授）がシューベルトの作品を独唱した。堀越吉春（牧師、ボストン大学）夫人がお雑煮を振舞った。なおモニカの父は MIT 教授で、母は日本人。
- ・ 2 月 3 日（大雪）：「アメリカ人の質問に如何に答へるか」について下記の諸問題を討議
 - マッカーサー元帥をどう思ふか

- アメリカの占領政策(日本占領)をどう思ふか。
- 日本の再軍備をどう思ふか。
- 日本に於ける共産主義
- 日本に於けるデモクラシー
- アメリカをどう思ふか。
- 日本に於けるキリスト教

・3月3日(花祭り): 広島で被爆した来訪者の話を聞いた後、岩村信二(Andover Newton Theological School)による「New Englandに於ける宗教」の話があった。

・4月13日: ボストン・マラソンの日本選手団が例会に顔を出した、ハーバード大学で日本語を学んでいる学生も同席して総勢で約50人となった。マラソンの日(19日)に応援に出かけることを決めた。

このとき田中茂樹選手が日本選手として初めてボストン・マラソンで優勝したが、この日は連合軍司令官を罷免されて帰国したマッカーサー元帥が上院の公聴会で演説したことがテレビで放映されたし、またハーバード大学と英国 Cambridge 大学との伝統あるボートレースも行われたとノートに書かれている。

・5月5日(端午の節句): 郊外のミルトン(Milton)貯水池へピクニックに出かけた。学年度末で試験を控えていたが21名が参加した。テニスやソフトボールに興じ、バーベキューを楽しんだ。当日の写真2葉(図10.1)が残っているが、写っている人は特定できない。



図10.1 1951年5月5日ピクニックの写真(2葉)

戦後の状況を書き終えた野島豊志は『ボストン日本人会の記録』のノートをカリフォルニアから1951年10月13日にケンブリッジへ郵送して14日に日本へ向けて旅立った。ボストンの仲間と日本で再会したいとして「友達よさらばまた祖国で会ひませう」と文を結んでいる。

なお1951年2月8日付けの Japanese Students in Massachusetts と題した英文タイプで打った名簿(氏名と州内の現住所)がある。野島が氏名を漢字に直して日本の住所を書き

加えてノートに貼り付けている。英文で 47 人、漢字で 45 人であり、人数にちょっとした違いがある。役員として堀越、萩谷、岩村と野島がこの順に書いてある、会長は堀越吉春（牧師）だったようである。

ところで上述してように月例会には毎回 20 人程度が出席したということなので出席率は 4 割程度だった計算になる。

(b-2) 1951 学年度

英文タイプで打ち出した名簿がノートに貼り付けてある。全体で 90 名であり、前年度より倍増している。大半はガリオア基金による留学生のようである、この基金はその後フルブライト基金に引き継がれて行ったわけである。

月例会が次のように盛大に行われた。

・10月6日：10月13日に開く歓迎会の準備のために主だったメンバーが集まった。そして新年度の役員として鈴木一郎（Albert Ichiro Suzuki, ボストン大学）、中西香爾（ハーバード大学）、丹呉次光（タフツ大学）を決めた。

・10月13日：英文で書かれた“The Japanese Student Association, Massachusetts Chapter”の歓迎会の案内状は Albert Suzuki の名で出されたので、鈴木が会長だったのが分かる。ライシャワー（Edwin O. Reischauer）が“The Problems of the Post-Treaty Japan.”という題で話すとの案内だが、興味深いことに”Thanks to the friendly advise of Dr. Reischauer and other people, Kyoto and Nara, the two classical cities of Japan, were spared from the bombing during the last war.”と書かれている。

当日の出席した人が名前を書き残している、総数で 83 名だが、そのほかに 9 名居たと事務局が書き足している。このなかに在留邦人や日系アメリカ人も多数入っている。

ライシャワーの話の前に鈴木がボストン日本人学生会の歴史を紹介している、そのために用意したと考えられる走り書きのメモがノートに貼り付けてあることは上述した。

・12月8日：明治末期に東大で日本文学を学んでエリセフ（ハーバード大学教授）が“Nihon Ryugaku-jidai-no Omoide”（“From the Memoirs of my Student-Days in Japan”）について話した。事務局が「エリセフ先生の話は日本語で、先生の東大学生生活、夏目漱石やその弟子達との交友等を中心とする思出話であったが、先生の日本語の上手さ、その持ち味、たくさんの日本的 jokes によって非常に面白かった。」と感想を書いている。

この講演会について『北米新報』という邦字新聞が 12 月 20 日号で下記のように報じたとして切り抜き記事が貼り付けてある。汚れていて読みにくいだが次のようである；

マサチューセッツ日本人学生会

ケンブリッジ発 ボストン大学、マサチューセッツ工学院、ハーバード大学等に留学中の日本人学生の数は百名を越えているが、これらの学生間で最近日本人学生会が結成され、ハーバード大学フィリップ、ブルック、ハウスで毎月最初の土曜日に会合が催されているが、今月の例会にはエリゼイエフ教授が日本語で日本文学史お歴史に関する講演を行った。

なお 12 月 23 日にボストン日本協会とボストン二世クラブ (Boston Japanese Church and Boston Nisei Club) がクリスマスの集会をするとの予告が 12 月例会の案内状に出ている。

・12 月 18 日：新年会の準備会を斉藤眞の家で行った。参加したのは幹事団の林容吉、山口麗子、高山利勝 (会計担当)、丹呉次光 (書記)、中西香爾 (接待係)、鈴木一郎 (会長)。

会の運営に当たり下記のことを論じた、また新年会の段取りを決めた。

- a. 会の性質として、ひろく米人、二世にも開かれた会でありたい。
- b. そのために、各学校の留学生アドバイザー (Foreign student advisor) などとの連絡を保ち、掲示などを通じて会に出席したい人々への機会を提供すること。(誰がするのだ?)
- c. すすんでは日米協会 (American Japan society) といった様なものが、また復活する様な機運をつくるといふこと。
- d. Frank Noro 君が一昨日 New Jersey に於ける飛行事故で、急逝されたこと。その追悼集の如きものへの援助を会員に要請すること。ならびに弔電 (林へ一任)。
- e. 明年度(1952-1953)への引継ぎに関して、残留組の中から委員を選ぶ必要のあること。

・1 月 5 日：外国人を招いて新年会を開いた。「九月に平和条約が締結されて以来、最初の新年を迎へた」と事務局が書いている。参加者名簿はローマ字で書かれており、合計欄に参加者 76 名とあり、その内訳は学生 39 名、二世 24 名、一世 3 名、訪問者 10 名だった。訪問者にはアメリカ人のほかオーストラリア人と中国人が各 1 名ずつ含まれている。

音楽家萩谷納の独唱、二世の八橋菊江のピアノ演奏があつて、「羊羹、すし、いなりずし等がととのへられ、ワイン及び正宗が卓上に並ぶ」なかで“年のはじめのためしとて”を歌った。幹部の年頭の辞に続いて、沖縄音頭、即製カルテット (萩谷、道明、丹呉、鈴木)、ウクレレ、シャンソン、サクラサクラの合唱があつた。最後にハーバード大学のフィリップス・ブルックス (Phillips Brooks) の作詞のベツレヘムの小さな町 (O little town of Bethlehem) を歌って散会した。

・2 月 15 日：2 月の例会をスライド・コンテストに変更したために委員会を斉藤眞宅で開催し段取りを決めた。

・2 月 17 日：依頼していたハーバード大学博物館のオースチン博士 (Dr. Oliver L. Austin) の講演が延期になったので会員の写した写真をスライドで投影して競うコンテストを実施した。実用になったばかりのカラー写真の出来映えもすばらしく盛会になった。

スライド・コンテストの商品を鉛筆で書いて会場に張り出したらしい大きな紙がノートに貼り付けてある。受賞者と思える人の名前がローマ字で小さく書かれている。

一等賞

シンドレラのスリッパーズ Sakayama

二等賞

キャデラック	一台	Dohmyo
三等賞		
白狐	一匹	Benson
等外	特製パーカー万年筆	

受賞したのは日系二世の William Sakayama、ガリオア留学生の道明栄爾、来賓のアメリカ人 Robert Benson とうまく分けられているが、意図的ではなく参会者の比率にそっているのだろう。

・3月10日：委員会を開催し、3月、4月、5月の予定を審議した。

・3月15日：米国海軍のキャンベル (George W. Campbell) 艦長が“Sound Public Relations Program For Japan” という講演を行った。講師を入れて48名の参加者だった。

図10.2の写真がノートに貼り付けられているが、写っている人の説明が無く不明である。



図10.2 1952年3月15日撮影

・4月10日：次年度委員への引継ぎ、5月例会の遠足および学生名簿作成について打ち合わせた。

・4月11日：GHQの天然資源局長を3年間務めたオースチン (Dr. Oliver L. Austin) が講演した。日本の野鳥の写真を見せるとの前触れだったが、日本では自然保護が複数の省に関わっており問題が起こると責任のなすりあいになって先に進まないことを氏の専門とする野鳥を例に挙げて具体的に説明した。最後に宮内省の鴨猟のスライドをみせて散会した。参会者は48名。

・5月11日：ブルー・ヒル(Blue Hill Reservation) で野外パーティを計画していたが、雨のためハーバード大学のフィリップス・ブルックス・ハウスでのスキヤキ・パーティに切

り替えた。参会者は名簿に書いた人の数より多くて 80 名だったとの記事がある、家族が参加したためらしい。

夕食後、「おはらぶし」をきりだしに、三池炭鉱ぶし、ギター、ウクレレ、活弁、チンドンヤ、沖縄の民謡等があって、「ホテルの光」を歌ってこの一年の学生会を終えた。

・5月12日：斉藤宅で本年度委員の解散会を行って昨日の残りのすきやきをたいらげた。

下記のことを討議した：

(i) 来年度(1952-53)の会の行き方について

- 学生以外に拡張するかを検討したが当面止めた。
- 講師は日本人、米人を問わず、テーマに適した人物をよぶ
- 会の頻度：隔月か毎月かが議論になったが後者に傾いた。
- Boston 地区留学生のみにする案が出たが、ともかく通知を欲する人々に通知することにした。
- 新来の留学生への助言（省略）

(ii) 日本でボストン会を設立する件は野島豊志と相談すること。

(b-3) 1952 学年度

・9月25日に委員会を斉藤真宅で行い、事務局の体制は「司会 市村、石川、案内状起案並に印刷：岡、小林 発送：菊地、石川、斉藤 饗応：神保」とすることに瞬時に決まった。また前年度の経験から学校別に委員を選ぶことにしており、後述する10月11日の新入生歓迎会の場で委員を決めている。

9月30日付で各大学の 留学生カウンセラー (Foreign Student Counsellor) と留学生 (Japanese Students in Greater Boston) に新入生歓迎会の案内状を斉藤眞の名前を出しているの、斉藤が会長になったのが分かる。

・10月11日：これまで出席者は自己紹介をやっていたが、集会の目的である「知り合いになるように」(getting acquaintance each other) のために隣人紹介方式にしたが、これは効果的だった。本年度の連絡責任者をハーバード大学より2名、MITより1名、ボストン大学より1名、その他より1名選出した。

参会者の名簿は無いが、事務局で次のように分析している。

ハーバード大学	23名
MIT	7名
ボストン大学	4名
その他の学校	9名
一世、二世	16名
アメリカ人	5名
計	64名

このデータによると学生以外が約 1/3 を占めている。

・10月18日：「日本人会第一回委員会」を石川(ハーバード大学)、小林(ハーバード大学)、神保(MIT)、高橋(大学不明)で開いている、会場はハーバード大学の学生食堂である。これまで学生の会と称していたのを日本人会と改称している。なお戦前から在留邦人や客員教授などが参加しており実質上日本人の集りだった。

次回の日本人会の講演テーマを「大統領選挙の講評」とし、小林が講師の候補者と交渉することになった。

日本人会の規則は直ぐには作らず、翌年度の委員会に申し送る規約の案を作る委員を決めるように次回の日本人会に提案することにした。これまでの経験から、このようにすれば次期設立委員会に円滑に事務の引継ぎができるとの配慮だと書記役の小林規威(政治学者、慶応大学)が書いている。なお日本人会の名簿を作成のためのカード(index card)の発注を石川氏に一任している。

ということから「日本人会」と改称したものの正式発足は次年度(1953学年度)としたわけである。

・11月15日：ハーバード大学で政治学を専攻して1949年に優等で卒業したホルボーン(L. Holborn)を講師に向かえて、11月4日に行われた大統領選挙の話をお聴いた。今回の選挙で20年に互り政権を保った民主党が共和党に破れた。彼は選挙の結果を四つの範疇に分け分析した。

- 大統領、上院下院議員、州知事に対する票の地域的、人種的、教育程度的分析
- G.O.P.選挙運動の近代化による技術的、経済的複雑性
- 新政府の体面する諸問題
- 破れた大統領候補者の地位

「我々日本人にとって啓蒙される所が多であった」と神保(MIT)が記している。

・12月14日：例会の日時と場所の書かれたページに1951年のボストン・マラソンに参加した4人の日本選手(田中茂樹(優勝)、小柳舜治(5位)、内川義高(8位)、押郷弘美(9位))と途中経過が絵解きされた図が貼り付けてある。何故このページに貼ってあるのかは不明である。

その隣のページに斉藤眞が書いた12月例会のコメントが貼り付けてあり、初めての試みとして日米の学生で討論会を行ったことが記されている。斉藤のコメントを纏めると、「日本の法律制度の変革から始めてG.I.の土産の混血児の問題に終わったが、日本人学生から米国の日本研究の目的、米国の言論の自由、マッカーシーの問題さらには新聞の教育性についての質問があり、アメリカ側は米国留学の日本に対する影響や日本の選挙の意味について等の質問があった。約一時間に互り行われた両学生間の質疑応答は活発をきわめたとは言えぬまでも、最初の試みとしては成功であった」である。このような討論会を今後もやって欲しいとコメントを結んでいる。

・1月4日：新年宴会を行った。江戸前にぎりは技術上の難点から止めて、ごもくずしとブタ汁にした。ニューヨークの田中商店より星島光平が買出して来た。ごもくずしは一世の象

川のおばさん(Haruko, 1887-1982)が一人で用意し、当日斉藤・菊地両夫人と二世の福岡(C. Juliet)嬢の協力でできあがった。

参会者は約 50 名だったと書かれているが名簿は残っていない。ごもくずしが余ったので一同におみやげとして箱につめて持って帰ってもらったと書いている。

会費は維持・連絡として 25 セント、食費として 1 ドルずつ集めたので、前回までの赤字を消したばかりでなく約 20 弗の黒字財政となり委員一同ホッとした。

・2月7日：ロックフェラー財団が企画した日米文化交流で安倍能成がボストンを訪問した。ノートに貼り付けてある斉藤眞のメモから要点を記す。

話が急だったが臨時留学生会を開き 23 名が集った。安倍能成は初めてのアメリカ訪問だったが、「東洋と西洋の違いにも拘らず、日米両国間に見受けられる人間としての同一性」について実例を挙げて論じて学生に多くの示唆を与えた。留学生は「アメリカの大学の基礎教育の確実さ、教授間の連絡の良さ、言語障害のもたらす困難」などの意見を述べた。その後、日本人学生と共にキャフテリアを経験する意味をこめて一緒に会食した。

・2月8日：2月例会は MIT でのスライド・ショーで 20 人ばかりが集ったというが、参会者の名前は書かれていない。会合で MIT の部屋を使う場合の留意点が書かれている。

・4月11日：ボストン・マラソンの金栗四三監督と 5 人の選手（山田敬蔵、西田勝雄、浜村英雄、廣島庫夫、篠崎 清）が例会に同席した。応援団を組織し、要所で日の丸の旗を振って正確な時間、順位と距離知らせて激励することにした。

ノートに結果が記されていないが、山田敬蔵は当時の世界最高記録である 2 時間 18 分 51 秒で優勝した。

・5月10日：五月の例会をブルー・ヒル (Blue Hill Reservation) へピクニックに行った。食糧準備は八橋氏及と久米川氏（前頁の桑川のおばさんのことだろう）の支援を得た。会が終わってから八橋氏の別荘 (Summer Villa) で休息している。参加者の氏名、人数は書かれていない。

(b-4) 1953 学年度

・10月23日：10月14日に下打合せをして MIT の鮎川弥一が会長になった。そして 23 日の新年度第一回の会合で新役員を以下のように選んだ。

ハーバード大学：高瀬保、斉藤光、浅野開作、嘉野敏夫

M.I.T.： 鮎川弥一、大橋宏

Newton College：塩原國子、大橋やす子

参会者が 55 名位だと書かれているが出席者の名簿は無い。

・11月21日：第一回役員会を嘉野敏夫宅で開いた。11月例会をやらなかったので 12月例会は忘年会を兼ねて MIT で行うことを決めた。”The meeting is planned to be the one in which we send the painful year of 1953 into the part of the good old memories.” と書いている、具体的には何を意図して至難な年 (the painful yea) と書いたのかは不明。

- ・12月11日：MITのウォーカーメモリアル (Walker Memorial) で忘年会を行った。参加者は45名だが氏名は書かれていない。山崎 (医学者) の謡曲、高瀬のジャンケン of セリフと所作、八橋菊江のピアノ等があり、蛍の光を合唱して散会した。
- ・12月20日：第二回幹事会を嘉野宅で開いて (第一回は「役員会」と書いている)、正月例会を相談した。案内状は大橋宏 (MIT) が引き受けて図 10.3 のように作った。門飾りは神保(MIT)、福助は大橋の作品。

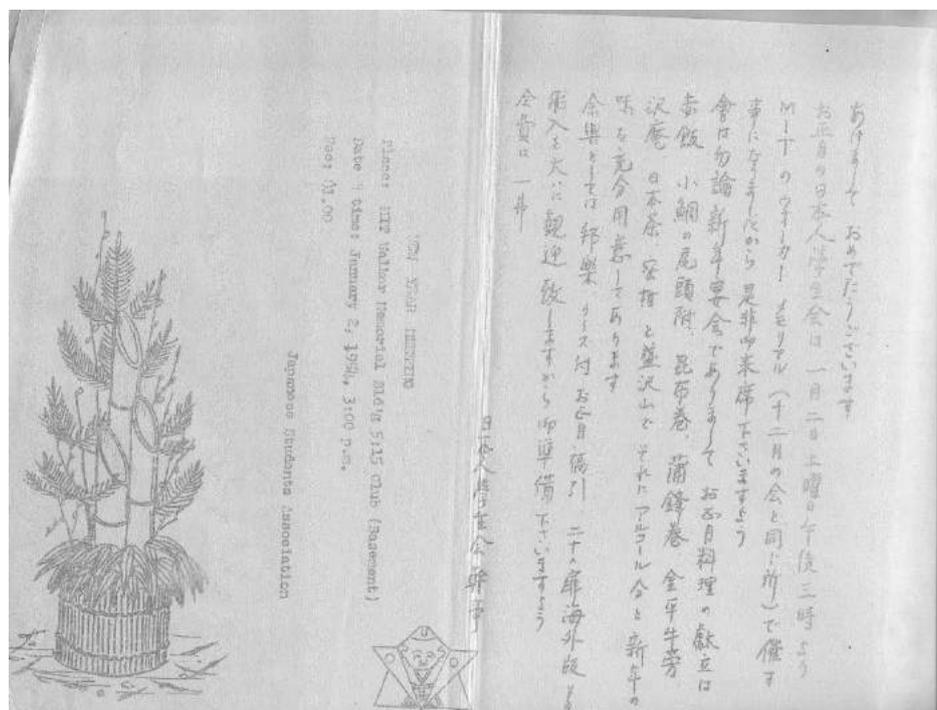


図 10.3 1954 年の新年会の案内

前年度には日本人会に発展させる動きがあったが、この案内状は日本人学生会 (Japanese Students Association) から出ている。

- ・1月2日：MITで新年会を開いた。謡ひ、風船遊び、二十の扉、八橋菊江のピアノ、福引、食事、記念撮影、八橋通夫のカラー・スライドなどを楽しんだ。出席者は総計で53名 (子供を含めて)だが氏名は不明である。

今回の会計結果として「収入：\$51.50 (子供半額)、支出：\$49.83であり、会の運転資金が相当潤沢になった」と嘉野敏夫が書いているので、大人が50人参加しその参加費は1ドルで、子供が3人参加していた計算になる。

- ・1月7日：第三回幹事会を嘉野宅で開いた。参加者は斉藤光(ハーバード大学)、高瀬保(ハーバード大学)、浅野開作(ハーバード大学)、大橋宏(MIT)、神保(MIT)、嘉野(ハーバード大学)。2月と3月の例会の段取りを決めた。
- ・2月5日：例会でスライド・ショーを行ったが普及を始めたばかりのカラー写真が多かつ

た。八橋通夫と菊江（在留邦人、二世）、尾高邦雄(ハーバード大学)、松島(大学不明)、神保壽夫(MIT)等がカラー写真を持て来た。日本の幼稚園(榎原夫人)、欧州風景(尾高)、イエローストーン公園(松島)、ハリウッド(浅野開作)のほか桑原登一郎（大学不明）の作品が好評だった。嘉野夫人、大橋保子・塩原國子(ともに Newton College of the Sacred Heart)両嬢、尾高夫人等で用意したサンドイッチ五袋分は売り切れて収支はプラスとなった。出席総数 58 名（氏名は不明）であり成功だった。

・3月5日：エリセフ教授が日本語でヒューモラスな話をした。昨年の日本旅行中にエリセフが写したカラースライドも好評だった。参会者 52 名の名簿がある、その中に遠くニューヨーク州ロチェスターから参加したノーベル賞受賞者の小柴昌俊が出ている。外人が数名出ているが日本語のできる人なのだろう。なお会の資金に余裕が出来たのでエリセフ教授に美術写真集(ギリシャ・フランス)を進呈したが、これが前例にならぬ様にしたいと断っている。

・3月13日：第四回幹事会を鮎川のアパートで行って、四月例会をボストン・マラソンに参加する日本選手の歓迎会にすることにした。

・4月10日：西田勝雄選手が風邪で発熱して欠席したが、伊藤寛監督、廣島庫夫、貞永信義両選手の三名が出席した。会員の出席者は 49 名。応援のための国旗八つ、昨年のボストン・マラソン優勝記念の手拭三十本および乾菓子二箱を日本から持って来て学生会に寄贈されたことを感謝している。懇談中にマラソン当日の応援団の体制を作り上げた。なお監督と選手がノートにサインしている。

このときの成績は次の通りで今回は優勝できなかった：

4位：広島 庫夫 2時間 25分 30秒

5位：西田 勝雄 2時間 27分 35秒

10位：貞永 信義 2時間 37分 19秒

・4月19日：第五回幹事会を嘉野宅で開催。出席者は鮎川弥一(MIT)、大橋宏(MIT)、高瀬保(ハーバード大学)、嘉野敏夫(ハーバード大学)と神保壽夫 (MIT)。5月例会をピクニックとし、レイクビル (Lakeville) まで車保有者が参加者全員を運ぶことにした。

・5月2日：雨のためピクニックを中止にしたが、八橋家の好意でシチュエイト (Scituate) にある別荘で予定通りにバーベキューを行った。盛会だったが、予定外の出費となり来年度への繰越金がかかり減ってしまった。

・6月13日：嘉野宅で納会を行った、出席者は次の通り：

嘉野敏夫(ハーバード大学)、鮎川弥一(MIT)、恵谷賢司(MIT)、長澤光一(MIT)、室賀弘(MIT)、莊原潔(MIT)、神保壽夫(MIT)、大橋宏(MIT)、高瀬保(ハーバード大学)、川角辰雄(MIT)

(b-5) 1954 学年度

1954 年度の幹事会と例会の記録が書かれていないが、マラソンの邦字新聞の切り抜きと

ボストン日本会(Japan Society of Boston)の開催通知がノートに貼り付けてある。本年度から留学生だけの会でないこととして会の名称を変えたのだが、会長を含めた幹事団の陣容が不明なので活動の母体が把握できない。

・新聞の切り抜き記事がノートに貼り付けてある(図 10.4)。選手の名前から 1955 年 4 月のボストン・マラソンの記事であることが分かる。

各選手の成績は次の通りであった。

優勝 浜村 秀雄 2 時間 18 分 22 秒

7 位 内川 義高 2 時間 22 分 40 秒

8 位 田邊 定明 2 時間 26 分 08 秒



図 10.4. 1955 年 4 月のボストン・マラソンの記事

なお新聞記事は Tadooki Tanabe となっているが山田敬蔵の指摘で田邊定明と判明した。

・ボストン日本会(Japan Society of Boston)の案内

12 月 2 日(木)にボストン日本会(Japan Society of Boston)の会合が行われることを伝える英文タイプで打ち出された案内状がノートに貼り付けてある。年号は書かれていないが、曜日から 1954 年であることが分かる。

この案内状は Secretary の Tamako Niwa が出しており、勧進帳の映画を見ることになっている。

会費として正会員の 5 ドルと学生会員の 2 ドルとの 2 つに区別しており、学生の会から発展的にボストン日本会が発足したのが分かる。ここで記事は終わっているのは、このボストン日本人学生会の活動を記してきたノートの役目が終わったからであろう。

なお整理されていないメモ類が別紙となって残っている。その中に 1955 年 4 月 19 日付のボストン・マラソン選手団を囲んだ写真がある（図 10.5）。翌 20 日に行われた大会で浜村秀雄選手が優勝したので、この場は激励会だった。



図 10.5 ボストン・マラソン選手激励会 1955 年 4 月 19 日

日本ボストン会の会員である山田敬蔵から、椅子に座っている左から 4 人目が優勝した浜村選手だと教えてもらった。なお左端はボストン日本人界の中心人物の八橋春通・茂喜夫妻、その背後の髪飾りの女性が八橋姉妹、前列最右端が長男の八橋通夫、立っている右から二人目がボストン日本人学生会の最後の会長だった鮎川弥一、最後列左端が緒方四十郎(タフツ大学)であるがそれ以外の方々は不明である。

10.2 主な人々、主な出来事

(a) 『ボストン日本人学生会の記録』を見つけ出した藤代素子

戦後留学した藤代素子が亡父の遺品の中から、この記録集を見つけたことを冒頭で述べた。素子は現地生まれの二世である。父親の藤代眞次が開戦後に『ボストン日本人学生会の記録』を保管していたのが現存につながっている。

デトロイト郊外に住んでいる素子（現在 Motoko Fujishiro Huthwaite）と連絡が取れた、往時を懐かしがって戦前からの写真を多数送っていただいた、また多くの留学生生についての情報を得た。

なお素子は戦後 Radcliffe に私費留学し優等で卒業した。卒業後の活動の場はアメリカで

ある。

(b) ポストン日本人学生会を再発足させた野島豊志

藤代素子から『ポストン日本人学生会の記録』を受取ったのが野島豊志である。野島は鹿児島県喜界が島の出身で九州帝国大学を卒業して戦前に弁護士の資格を取っていた。実兄である淳三がコネチカット州スタムフォードで日本食店を戦前から営んでいた縁で戦後まもなくして留学した、戦後にハーバード大学のロー・スクール **Law School** で学んだ最初の日本人である。正式にポストン日本人学生会が再発足する前の段階で、留学生仲間の纏め役をやっていたことは上述の通りである。

帰国後に銀座に弁護士事務所を開いた。また喜界が島出身だったので奄美諸島の本土復帰運動に加わって国会陳情を行ったが、そのとき国会議員として苫米地英俊が対応した。二人が留学生の先輩後輩だったことが『ポストン日本人学生会の記録』で分かる、しかし二人は知る由も無かったことだろう。

日本でポストン留学生の会を立ち上げることが野島に期待されていた、1980年に急逝したのが惜まれる。

(c) 次々に新機軸を編み出した斉藤眞

1952 学年度にポストン日本人学生会の会長だったのが斉藤眞である、厳父勇（たけし）は著名な英語学者だったし、弟の光もハーバード大学に学んだ。会長になる前年から会の運営に深く関わって例会に新機軸を次々に編み出した。大物の講師を招聘したり、日米の学生で両国間の諸問題を論じたり、実用になったばかりのカラー写真によるスライド・コンテストを行うなどポストン日本人学生会の発展に尽力した。

また実現は後日のことになるが、学生だけの会から在留邦人や社会人を巻き込んだ大きな活動への布石を敷いたことも特筆すべきである。なお斉藤は政治学者として文化勲章を授賞した。

(d) 幹事として活躍した小林規威

日本ポストン会の会員である小林規威（政治学者、慶応大学名誉教授）は留学中にポストン日本人会の幹事として活躍した。例会の講師の斡旋のほか司会も務めている。小林の書いた幹事会の議事録が『ポストン日本人学生会の記録』に残っている。

小林は日本ポストン会の会報に当時を回想して「外国に来たら出来るだけ日本人に会わず米国人と交わろうというのが留学当初の私の考え方であった。しかし年何回かの日本人学生会の集りは東京へのホームシックを忘れさせ有意義な日本人留学生間の交流を深める重要な役割りを担っていたことも亦正しかった」と書いている。

(e) カルテットで歌った道明栄爾

日本ボストン会のホームページで『ボストン日本人学生会の記録』の概要を紹介しているが、その記事を「偶然に見つけて自分の名前がでているので驚きました。」と言って道明栄爾(元丸紅勤務)から電子メールが届いた。道明はボストン大学への戦後初の留学生であるが、留学中に『ボストン日本人学生会の記録』を見たことを「前の方には浅野良三氏宅で集まったと書いてあり、後の方には都留重人先生や名取順一氏の名があった。」や「山本五十六元帥閣下などの著名人の署名を見た」などのように鮮明に覚えている。

1952年の新年会のカルテットのことは上述したが、その一員だった道明はその写真を今も大事にしているという。なおこのカルテットの他のメンバーである Albert Ichiro Suzuki(日系人、鈴木一郎)と萩谷納はシンフォニー・ホールのそばのアパートのルームメイトだったが、このアパートには戦前から日本人留学生が入れ替わり立ち代り住んでいた。上述した上條勉は戦前に住んでいたが南京虫に悩まされたと書き残している、しかし戦後の鈴木と萩谷は DDT でその悩みを解消したことだろう。このアパートは現存する。

1952年2月15日のスライド・ショーで2等賞を取ったのが道明だった。賞品のキャデラックはむろんモデル・カーだろう。

なお上記の小林規威と道明は後年(1975年)カナダのブリティッシュ・コロンビア大学が主催した”Our Japanese Future”という講演会に一緒に参加したという。留学時代の経験が活かしたことだろう。

(f) 日本人で初めて MIT の理事になった鮎川弥一

最後の日本人学生会の会長が鮎川弥一である。1951年から1966年までの長期間 MIT で学び研究したが、その後日本人で初めて MIT の理事になった。

「正月の集会のため有志がわざわざニューヨークまで買出しに行って手に入れた御餅にカビが生え、夜なべし乍らたわしで洗って、それとも知らぬ会員諸氏に正月の御雑煮を味わって頂いた」と隠れ話を後日明かしている。幹事団にはこの種の秘話があることだろう、苦労が伝わってくる。

(g) 禍が福に転じた留学生 明石陽司

『讀賣新聞』の昭和26年7月15日号夕刊に「不幸なる幸運児」という記事がある。進駐軍の通信隊に勤務していた明石陽司(当時22歳)が米兵の気まぐれがもとでエレベーター事故に遭い片足を失うという禍を蒙ったが、軍関係者の配慮でボストン郊外のイースタン・ナザレン大学に留学することになりラッキーと愛称されるようになったと書かれている。

ライシャワーが講演をした1952年10月11日の例会に明石が参加する予定であると同校の学籍係が書いた手紙が残っている。

明石は同校で学士号を取得してからジョージ・ワシントン大学で博士号を取得して歴史学者になった。東南アジアにおける日本軍研究の第一人者である。

11 考察

11.1 留学生像を示すデータ

(a) 『ボストン日本人学生会の記録』の時代背景

ボストンの反対側にあるアメリカ西海岸で激しかった排日運動は、1907年11月から1908年2月までに日米両国で交換した7部の書翰、覚書で対米移民制限に関する日米紳士協約が成立し、旅券の発行を厳重に制限することで一応鎮静化した。

『ボストン日本人学生会の記録』の最初の記事の日付は1908年11月1日であり、日米紳士協約が成立した次の学年度である。その時までいくつかの大学に日本人と日系人で構成するJapan Clubが存在した。そして大学間をまたがる組織的な活動を目指したのがボストン日本人学生会である、日本人のためのJapan Clubからアメリカ人との交流を深める活動への転換を目指したと考えられる。

太平洋戦争直前から終戦までの記録は無いが、終戦を待っていたかのように留学が再開する。そして学生だけの活動から社会人を含めたより大きな組織活動へと拡大する時代の要請を受けたように1955年にボストン日本会(Japan Society of Boston)が発足して、ボストン日本人学生会は発展的に解消した。1955年6月13日に幹事団で納会を行ったことを上述した。その出席者の一人である室賀弘(後に日本電気(株)取締役)にその意識はなかったようであるが、事実上ボストン日本人学生会を解散するための納めの会であった。

なおその後ボストン日本人会(Japanese Association of Greater Boston)と改称して現在も活発に活動を続けている。

(b) 統計的なデータ

『ボストン日本人学生会の記録に名前』が出てくる健在の方で、この活動を知らなかったとか知っていたが会合に出なかったという人に何人も出あった。

そこで簡単に分かる範囲で出席状況を調べてみる。先ず山本五十六の出た1919年12月の会合を例にとると24名が署名している。その学年度末の1920年5月付の現地留学生の名簿が残っていて82名(内2名は留学生の夫人)が載っている、これをもとにすると出席率は30%に届かない。しかも名簿に出ている人に限定すると16名しか出席していないから20%程度、つまり5人にひとりしか出ていない計算になる。出席者には短期的な滞在者で学籍を持たない人、さらには社会人である在留邦人が居たためだと考えられる。

山本五十六のケースは共時的なデータだが、経時的なデータの一例として日本MIT会が1955年時点で作成した名簿を取り上げる。この名簿はその時点の生存者が93人出ているが、『ボストン日本人学生会の記録』がカバーしている大正期から終戦直後までの期間に留学した人である。93人の内の36名がボストン日本人学生会の会合に出席しているのが確認できた、比率で言えば39%であり、過半数の人が会合に出ていなかった計算になる。

勉強が忙しかったとか、留学中は英語に親しむために日本人と付き合わないようしていたなどを欠席の理由として上げる人が多かった。ということで記録集が留学生の全体像そのものを語るものとは言えない、しかしランダム・サンプリング的な統計データとしてボストン地区の留学生像を示すものと考えることができる。

(c) 時代を反映するデータ

明治初期にボストン地区に留学した金子堅太郎、小村寿太郎や團琢磨などは日本に近代的な学校制度が出来上がる前だったので、大学に入る前の段階の教育を先ず受けた。しかし『ボストン日本人学生会の記録』は明治 41 年以降の記録なので、日本で高等教育を受けてからボストン地区の大学の大学院で学んだ人がたいはんである。それゆえボストン日本人学生会のメンバーは一両年で入れ替わることになり、この種の活動に理解のある学生が居るかどうかで活発さに差が出る。つまり全期間を通して均一なデータではなく、それぞれの時代を反映したデータである。

11.2 日本人・日系人

『ボストン日本人学生会の記録』に登場する日本人・日系人は 670 人余であり、80%強の方々について何らかの個人情報が見られた。しかし日本人か日系人かの区別がはっきりしない人が何人か居るので、ここでは両者を区別しないことにする。

(a) 日本人・日系人の分類

日本人・日系人でボストン地区の大学で学んだ人、その夫人、短期的な来訪者、在留邦人、ボストン地区以外の大学関係者、およびこの分類に入らない人を大学不明者として、その人数比率を図 11.1 に示す。

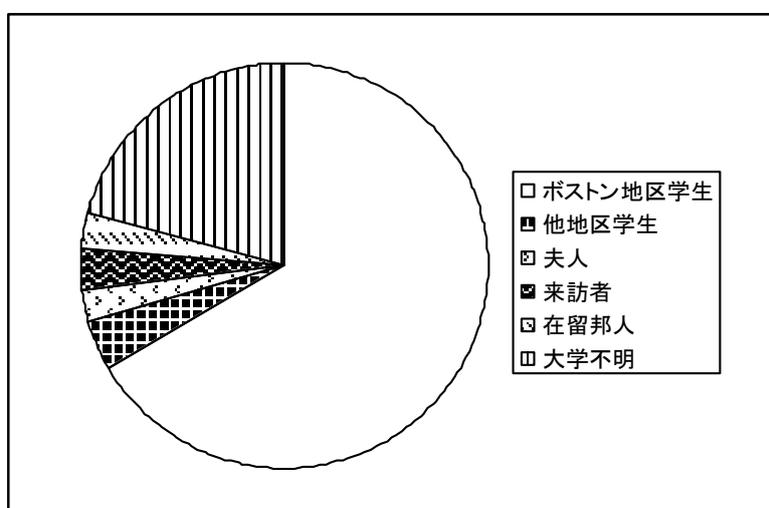


図 11.1 日本人と日系人の分類

他地区大学とはニューヨークやシカゴなどの関係者がボストンの会合に参加したケースである。

主な来訪者に高平小五郎（駐米日本大使）、菊池大麓（文部大臣）、新渡戸稲造（思想家）、安倍能成（哲学者）、山田敬蔵(マラソン選手、日本ボストン会・会員)などが居る。

(b) ボストン地区の留学先

図 11.1 でボストン地区大学と分類した人々を大学別に分けると図 11.2 のようである。

ハーバード大学が過半数を超える、MIT(マサチューセッツ工科大学)が約 1/4 であり、これにボストン大学を加えると 85%になる。優秀な方々がボストン地区の著名校に留学したことが背景にあらう。

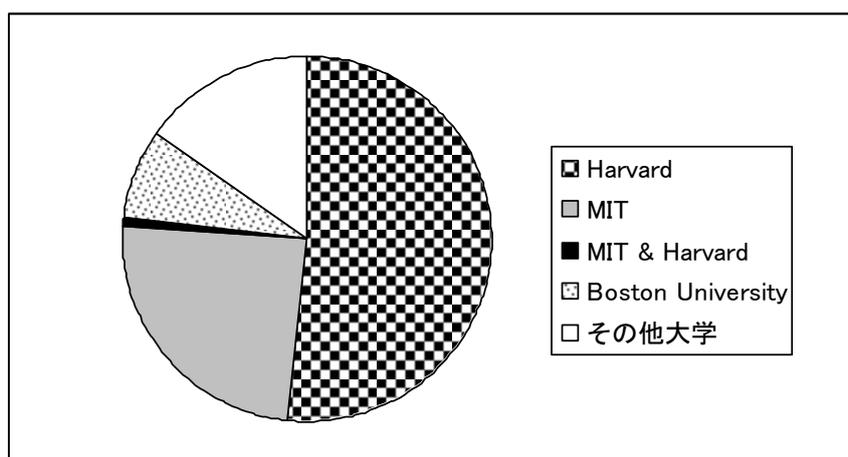


図 11.2 日本人・日系人とボストン地区大学

ところで一人しか留学していない学校にも特徴がある。一例を挙げるとパーキンス学院 (Perkins Institute) という盲学校に学んだ石原マツという女学生が居る(戦後)、これだけでも深い感動を感じる。なおヘレン・ケラーに Literacy の道を開いたことで知られるサリバンは同校の先生であった。

(c) 時代別人数推移

1908 学年度から 1954 学年度までのほぼ半世紀の記録であるが、5 年間毎に区切って、その 5 年間における日本人と日系人の人数の推移を図 11.3 に挙げる。

ノートが 1 冊行方不明になっていることもあって太平洋戦争開戦前の記録が無いのだが、何かのゲームの成績表と思える資料が残っている、それに出ている人を取り上げた。実際には現地に留まって仕事を続けた邦人が居たことが知られている、ちなみにアメリカ東部には西部のような日本人強制収容所は存在しなかった。

人数が一番多いのは 1950 年代である、その大半はガリオア基金による留学生である。

1910年代後半が多いのは第一次世界大戦中のため戦時下のヨーロッパに留学できないので、アメリカへの留学に切り替えたためである。

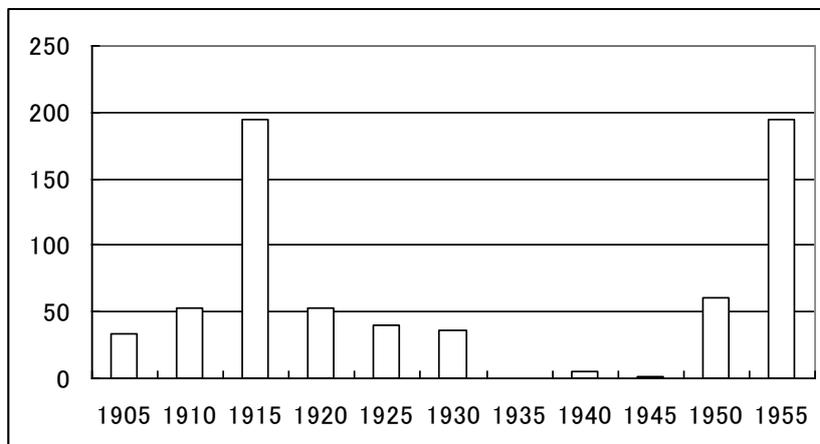


図 11.3 5年単位で勘定した日本人・日系人の数の推移

なお早い時期ハワイからボストン地区に遊学した学生が少なからず居る。「布哇中学校を優等卒業し伏見宮記念奨学会から抜擢され米大陸の大学に留学（布哇日本人名鑑、曾川政男著、昭和元年刊）」という丸本正二の記事（1929年）に接すると、排日運動をバネにして組織的な仕組みを作りあげた日系移民の懐の深さを感じる。

11.3 アメリカ人

『ボストン日本人学生会の記録』に登場する外国人は 190 人余である。大半はアメリカ人であり、極少数だがそれ以外の国の方もいる。著名人を散見するが、無名の親日家も少なくない。この中に名前(first name)がイニシャルであるために追跡不能な方が居る。これらの方々を除くと約 6 割の方々について何らかの個人情報が得られた。

5年間毎に区切って、その期間における外国人の人数の推移を図 11.4 に挙げる。

1925 年以降終戦までゼロの時代が続く。この背景にカリフォルニアを中心とした排日運動をもとにアメリカで排日移民法が 1924 年に成立し帰化権を拒否された日本人は入国を禁じられたことが背景にある。つまり親睦目的とは言えアメリカ人に茶話会に参加を求めることが公式に出来なくなったためだと考える。終戦後の 1952 年に法改正が行われて廃案になるまでの 28 年間、日米関係は冷えきったままであった。図 3、図 4 はまさに日米関係の縮図である。

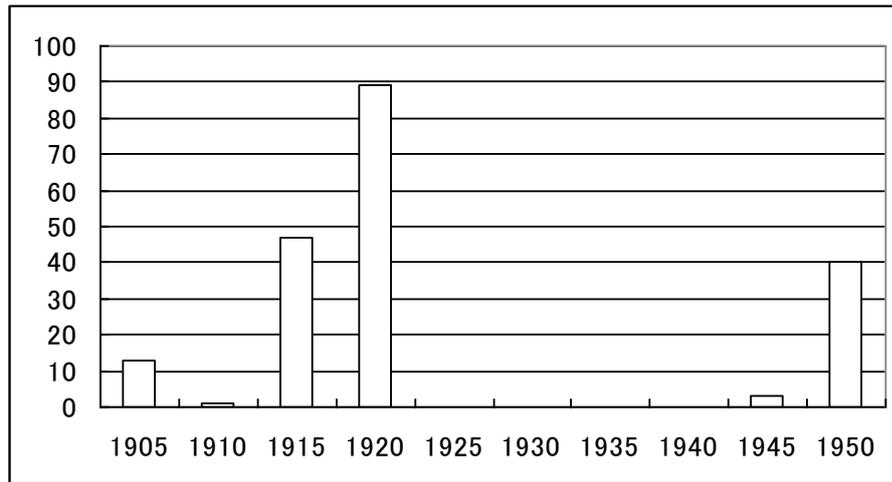


図 11.4 5年単位で勘定した外国人の数の推移

12 むすび

明治末から終戦直後までの40余年間にボストン地区の大学で学んだ留学生と、その周辺の人々を包括的に紹介した。ボストンはアメリカの学問と起業の一つの拠点であり、現在も留学を目指す人が多い。

これまでに明治維新直後の留学生の研究は数多くなされてきた。しかし明治後期以降は個人の記録を除いて纏った形の留学生の研究を知らない、関係者の参考になれば幸いである。

第1版作成	2019.12.24
第2版作成	2019.12.29
第3版作成	2020.01.02
第4版作成	2020.01.06

ボストン日本人学生会の記録

日本ボストン会会員 三好 彰

著作 日本ボストン会会員 三好 彰

編集支援 日本ボストン会会員 小野田 勝洋

印刷製本 SHIMAUMA PRINT

©2020 AKIRA MIYOSHI